### 宮城学院女子大学大学院

### 人文学会誌

第 19 号



### 2018年3月

英語・英米文学専攻 日本語・日本文学専攻 人間文化学専攻 生活文化デザイン学専攻

### 宮城学院女子大学大学院

### 人文学会誌

第 19 号



### 2018年3月

英語・英米文学専攻 日本語・日本文学専攻 人間文化学専攻 生活文化デザイン学専攻

### 目

夏目漱石『坊っちやん』論―坊っちやんは何処から何処へ行くか― 島崎藤村と函館―『津軽海峡』を中心に、藤村らしい一つの予定調和―

修士論文題目及び内容の要旨

青年期女子の両親に対するイメージと精神的健康について ―きょうだい関係の視点―

地方都市の内発型地域振興の研究

菊 田 あ み

(1) (6)

遠

藤

恵

美

伊 伊 狩 狩

弘

弘

23 1

## 夏目漱石『坊っちやん』論

# −坊っちやんは何処から何処へ行くか−

伊

狩

弘

ん』事典』の「はじめに」が要領よくまとめているので引用する。『銀河鉄道の夜』くらいであろうか。その辺りの事情を『坊っちやは言うまでもない。贅言ではあるが『坊っちやん』と双璧と言うとては人々に広く親しまれ、よく知られている作品の一つであることギス』に百五十頁全文掲載された小説で、日本の近代文学作品とし著日漱石の『坊っちやん』は明治三十九年四月の俳句雑誌『ホトト夏目漱石の『坊っちやん』は明治三十九年四月の俳句雑誌『ホトト

夏目漱石『坊っちゃん』は、日本人に最も親しまれた小説の一夏目漱石『坊っちゃん』と呼ばれた男が「四国辺のある中学校」(一)に赴任「坊っちゃん」と呼ばれた男が「四国辺のある中学校」(一)に赴任「坊っちゃん」と呼ばれた男が「四国辺のある中学校」(一)に赴任っ子である坊っちゃん』を収めた書籍の種類は優に二〇〇を超えている。『坊っちゃん』はまた、教科書教材に採用され、児童文でいる。『坊っちゃん』はまた、教科書教材に採用され、児童文でいる。『坊っちゃん』はまた、教科書教材に採用され、児童文でいる。『坊っちゃん』はまた、教科書教材に採用され、児童文で・アニメ・漫画など、他のメディアに翻訳される機会も多く、「ロディ作品も次々と生み出されている。舞台とされている松の「ロディ作品も次々と生み出されている。舞台とされている松の「ロディ作品も次々と生み出されている。

いとして次のように続ける。
いとして次のように続ける。
には数知れない。『坊っちゃん』はまさに「国民的」名作である。
どは数知れない。『坊っちゃん』はまさに「国民的」名作である。
どは数知れない。『坊っちゃん』はまさに「国民的」名作である。
とは数知れない。『坊っちゃん』はまさに「国民的」名作である。

支持されてきたと言えよう。発見をもたらすゆえに、わずか原稿用紙一五○枚の中編小説は、奥行きはらむ作品でもある。多面的な表情を持ち、読むたびにった。『坊っちゃん』は、わかりやすい物語の先に翳りを帯びたった。『坊っちゃん』は、わかりやすい物語の先に翳りを帯びたった。『坊っちゃん』は、

以上「はじめに」から引用したが、全体として穏当な評価であろう以上「はじめに」から引用したが、全体として穏当な評価であろうが、しかし細かく考えるとこれは『坊っちやん』という小説の全体像が、しかし細かく考えるとこれは『坊っちやん』という小説の全体像を問題点に迫っているとは言えない。そもそも漱石はどのような思思い立ったのか。その根本的なモチーフやテーマは何だったのか。「歯切れのいい語り」や「裏表のない性格」は確かにそうであろうが、「おれは」「おれが」という一人称独白体小説の直線的展開、善悪二類型的な人物配置といかにも短慮な結末の単純さ幼稚さ、さらに清という江戸時代の御女中の成れの果て的下女の存在などはモデルも居が、しかしばいかによりである。

年生きたのかはっきりしないが、清の死後、二十歳から左程遠くないるが、そこに至るまでの胚胎期間、即ち物語の成立するまでに相いるが、そこに至るまでの胚胎期間、即ち物語の成立するまでに相いるが、そこに至るまでの胚胎期間、即ち物語の成立するまでに相当の時間と成立の為の諸契機が必要であったことは言うまでもない。当の時間と成立の為の諸契機が必要であったことは言うまでもない。当の時間と成立の為の諸契機が必要であったことは言うまでもない。当の時間と成立の為の諸契機が必要であったことは言うまでもない。当の時間と成立の為の諸契機が必要であったことは言うまでもない。当の時間と成立の為の諸契機が必要であったことは言うまでもない。当の時間と成立の為の諸契機が必要であったことが知られて対して死んで仕舞つた」(十一)のである。坊っちゃんの帰京後、清は何て死んで仕舞つた」(十一)のである。坊っちゃんの帰京後、清は何て死んで仕舞つた」(十一)のである。坊っちゃんの帰京後、清は何て死んで仕舞つた」(十一)のである。坊っちゃんの帰京後、清は何て死んで仕舞つた」(十一)のである。坊っちゃんの帰京後、二十歳から左程遠くなりましているが、清の死後、二十歳から左程遠くなります。

軌跡を『漱石研究年表』などから辿ってみる。ではなく、年齢も昔式に数えれば四十歳、不惑の年であった。そこではなく、年齢も昔式に数えれば四十歳、不惑の年であった。そこい時点で坊っちゃんはこの小説を語ったような形にはなっている。

十六円程度と思われる。
十六円程度と思われる。
日報三十六年七月、夏目金之助は帝国大学文科大学英文学科第二明治二十六年七月、夏目金之助は帝国大学文科大学英文学科第二年六円程度と思われる。

明治二十七年二月、風に罹り咽喉を痛め血痰出る。医者に、肺結 の情しまる、」などと句を添えている。また大弓の流行に倣って自 養を怠らぬ様にする事専一なり」云々と書き、「何となう死に来た世 が下く咽喉を痛め夫より細き絹糸の如き血少々痰に混じて咯出仕 すいたく咽喉を痛め夫より細き絹糸の如き血少々痰に混じて咯出仕 ずいたく咽喉を痛め夫より細き絹糸の如き血少々痰に混じて咯出仕 ずいたく咽喉を痛め夫より細き絹糸の如き血少々痰に混じて咯出仕 ずいたく咽喉を痛め夫より細き絹糸の如き血少々痰に混じて咯出仕 がいたく咽喉を痛めきなり喉処只今の処にては心配する程の事はなく矢 と同うの情しまる、」などと句を添えている。また大弓の流行に倣って自 の情しまる、」などと句を添えている。また大弓の流行に倣って自 のも弓を引いていると書き、「何となう死に来た世 のも弓を引いていると書き、「何となう死に来た世

着。七時四十分鹽竈停車場着というような旅だったと推定されるが、八月に松島への旅をした。上野午前六時四十分発、仙台午後七時

翌々年の二十九年に寺で起こった失態の責任をとって瑞巌寺から仙 朔(新暦で八月三十一日)つまり二百十日の荒波に揉まれたのだと言 鹹水に浸り」云々とある。 寺に詣でし時南天棒の一棒を喫して年来の累を一掃せんと存候へど 斐なく理性と感情の戦争益劇しく恰も虚空につるし上げられたる人 何日の旅をしたかは不明である。 この大梅寺を訪れたのかもしれない。 古刹である。あるいは漱石は瑞巌寺に赴く前に国居国師創建になる して、陸前の大梅寺へ行つて、修行三昧ぢや。」(五)として出てくる 台の大梅寺に転じた。大梅寺は『草枕』に「泰安さんは、 様である。 う。この書簡を見るに、漱石は八月にかなりの期間仙台近辺に滞在 て故郷に帰るや否や再び半肩の行李を理して南相の海角に到り日夜 も生来の凡骨到底見性の器にあらず其丈は断念致し候故踵を回らし 前するの勇気なくなり候為と深く慚愧に不堪去月松島に遊んで瑞巖 を断ずるの斧なきを如何せん抔と愚痴をこぼし居候も必竟驀向に直 命到底無覚束候俊鶻一搏起てば将に蒼穹を摩すべし只此頸頭の鉄鎖 間の如くにて天上に登るか奈落に沈むか運命の定まるまでは安心立 配して成し崩しに心の穏かならざるを慰め度と存候へども何分其甲 げて歩ける丈歩く外他の能事無之願くば到る処に不平の塊まりを分 の漂泊は此三四年来沸騰せる脳漿を冷却して尺寸の勉強心を振興せ の旅行を評して健羨々々と仰せらるゝ段情なき事に御座候元来小牛 ん為のみに御座候去すれば風流韻事抔は愚か只落付かぬ尻に帆を挙 月余りの時期に書かれたものだが、戦争には何も触れていないで - 夜又々持て余したる酒嚢飯袋を荷ひてのそく〜と帰京仕り候小牛 瑞巌寺に中原南天棒(鄧州)を訪ねて禅の悟りを開こうとした模 南天棒は明治二十四年に赴任したが、 おそらく鎌倉辺りで泳いでいるうちに八 九月四日付子規宛書簡には「拝啓 この書簡は日清戦争開戦から 漱石が参禅した その後発奮

> 弱の悪化による一連の行動とも見られる。 電子のものの根本的安定と悟達とを重んじる人間であったようだ。 なと言えよう。漱石は社会の中の自分の安定を求める以上に、人間 れと言えよう。漱石は社会の中の自分の安定を求める以上に、人間 なが、漱石の精神的 追求自我確立に焦慮したことの表れとも見られるが、漱石の精神的 追求自我確立に焦慮したことが表れとも見られるが、漱石の精神的 は求自我確立に焦慮したことが表れる。青年らしい自己

円だった。 等師範学校と東京専門学校を辞して、愛媛県尋常中学校嘱託教員に 二郎宛書簡で「小生儀今般愛媛県尋常中学へ赴任の事と粗決定」と書 激しさを増したこの時期の年末年始の二週間参禅するというのはや と同期に赴任し、坊っちゃんのモデルに擬せられる弘中又一は二十 序ながら英語の西川忠太郎は四十円、数学の渡辺は三十五円 休職。実際に狸というあだ名だったようだ)は月給六十円であった。 なることに決める。外人教師なみの待遇なら行くと申し出たようで に向かった。同じ頃、 はり漱石という人間の特性、社会との距離感を見ることが出来よう。 け、「父母未生以前本来の面目」という公案を貰う。 き送り、赴任のために五十円程金を貸してほしいと書く。そして高 介で鎌倉円覚寺に釈宗活を訪ね、帰源院に入り、釈宗演の指導を受 よく知られる通り月給は八十円、 明治二十八年三月三日、 十二月二十三日夜、または翌日朝から翌年七日まで、 体操の浜本は助教諭で十二円、書記寒川(寒川鼠骨の父)も十二 漱石も西漸の途に就く。三月十八日付菊池謙 正岡子規は『日本』の従軍記者として広島 住田昇校長(明治28年10月16日に 戦争もいよいよ 菅虎雄の

時四十五分(推定)新橋停車場を発つ。八日午前七時三十五分、神漱石の松山行きの行程を辿ると、明治二十八年四月七日、午前十

想したものででもあろうか。 連れて行かれ、 とを命ずると城戸屋(松山市三番町、現松山市二番町四〇一の七)に 側(松山市)停車場に辿り着く(運賃三銭五厘)。車屋に宿屋に行くこ 後五時五十六分、 いたずらをされるという筋立ては、他の教師か友人達から聞いて着 なので学級担任や宿直勤務はなかった。小説で宿直の晩に生徒から と殆んど同じである。 次の間付きの部屋に部屋を変えられた。茶代を奮発する辺りは小説 伊予軽便鉄道に乗り、古町停車場を経て、二十分ほどかかって、外 る二日がかりで三津浜に到着した。午後一時四十一分三津浜港発の う。宇品から船に乗り三津浜港へ漕ぎ出し、九日午後、東京からま 戸停車場に到着。午前九時(推定)神戸発の汽車で広島に向かう。 竹の間に通される。茶代十銭を出し、十畳に五畳の 広島停車場に着いた。宇品へ人力車で(推定)向 翌日の四月十日、嘱託教員の辞令出る。嘱託 午

云つたら私一人なのですから、もし「坊ちやん」の中の人物を一々実践した後は校長代理となった。帝国大学応用化学科を卒業した理学古で漱石と親しく、共に釣りをしたこともある。作中に坊っちゃん間舎の中学へ赴任しました。それは伊予の松山にある中学校です。間舎の中学へ赴任しました。それは伊予の松山にある中学校です。間舎の中学へ赴任しました。それは伊予の松山にある中学校です。時分よく訊かれたものです。誰の事だつて、当時其中学に文学士といふ渾名を有つてゐる人があるが、あれは一体誰の事だと私は其時分よく訊かれたものです。誰の事だつて、当時其中学に文学士といふ渾名を有つてゐる人があるが、あれは一体誰の事だと私は其時分よく訊かれたものです。誰の事だつて、当時其中学に文学士といふ渾名を有つてゐる人があるが、あれは一体誰の事だと私は其時分よく訊かれたものです。。誰の事だつて、当時其中学に文学士と、本で練行の中学の教頭は理学士の横地石太郎で住田校長が休瀬石在職時代の中学の教頭は理学士の横地石太郎で住田校長が休瀬石在職時代の中学の教頭は理学士の横地石太郎で住田校長が休瀬石在職時代の中学の教頭は理学士の横地石太郎で住田校長が休瀬石をいた。

ャツが流行っていたという証言もあるようだが定かでない。になります。」と語った。実際に赤シャツを着ていたかどうか、赤シければならんので、――甚だ有難い仕合せと申し上げたいやうな訳在のものと認めるならば、赤シヤツは即ちかういふ私の事にならな

は説明している。 
は説明している。 
は説明している。 
は説明している。 
は知明している。 
は説明している。 
は対対したのと同じく、 
なり一月半遅れて赴任した。 
漱石が熊本に転勤したのと同じく、 
翌本四月に弘中も熊谷中学に転任したので、 
偶然とは言え小説の中のたピューリタン精神、「子供のように純粋で自分を飾らない温かいたピューリタン精神、「子供のように純粋で自分を飾らない温かいたピューリタン精神、「子供のように純粋で自分を飾らない温かいたピューリタン精神、「子供のように純粋で自分を飾らない温かいたピューリタン精神、「子供のように純粋で自分を飾らない温かいた。」と中野登志美とする性質は、 まさに坊っちゃんそのものであった。」と中野登志美とする性質は、 
まさにおりまする。

東京へ帰り、 磨保養院に入り、八月二十日に保養院を出、 子規は五月二十三日に神戸に上陸し、しばらく入院した後退院、 四畳半)に正岡子規が来て、二階部分を居室にした。子規は十月十 番戸上野義方の離れ、二階建て、二階が六畳・三畳、一階が六畳 にある。明治二十八年八月二十七日、漱石の借家(松山市二番町八 に上り茶を飲み菓子を食ひ湯に入れば頭まで石鹸で洗つて呉れると 出掛けている。「道後温泉は余程立派なる建物にて八銭出すと三階 る。その後漱石には中根鏡との見合い話があったりして、年末には に運座を催したり散策して句作したりし、漱石も盛んに句作した。 九日まで、五十二日間そこに滞在し、柳原極堂や村上霽月らととも いふ様な始末随分結好に御座候」(5月10日、狩野亨吉宛)と書簡中 さて、松山に赴任した漱石は、五月十日までに道後温泉に二三回 鏡との婚約が成る。翌明治二十九年一月七日、 松山に帰省したのであ 再び松

第五高等学校教授(嘱託)に着任したのである(月給百円)。三日、久留米を経て池田(現、上熊本駅)停車場に着き、四月十四日、松山の三津浜港を出発、宇品、広島を経て汽船で門司に着いた。十山に向い、三月には熊本五高への転任が内定した。そして四月十日、

算すると月給二十万円にもならぬ安月給であった。また妻の鏡には 特段の変化も事件もないようだが、翌年になると九月頃には、 二月二十八日から『草枕』のモデルである小天温泉に出掛けるなど、 矩(なおただ)は父の死後、宅地や家屋を売却し、引越ししたという に換算すると月給百万円くらいだろうか。が、ロンドンの物価に換 月額百五十円であるから五高の給料の五割増しで、現代の貨幣価値 回給費留学生として、神田乃武と共に満二ヶ年イギリス留学を命ぜ ルである。明治三十三年五月十二日、英語研究のため、文部省第 へ行き、戸下温泉、内牧温泉に泊まった。これは『二百十日』のモデ 長女筆が誕生した。同年八月二十九日から山川信次郎とともに阿蘇 の悪阻とヒステリーがひどくなった。明治三十二年五月三十一日 頃奨学金の返済も完了したので余裕が出来たようだ。明治三十年十 ので、幾分『坊っちやん』の兄さんに通うところがある。 年六月二十九日に歿したので、仕送りは必要なくなる。また兄の直 費二十円で、残った五十円程度が家計費であった。 済が七円五十銭、父直克に仕送り十円、 月給は百円だが、そこから製艦費十円を引かれ、さらに奨学金の返 にはロンドンまで西漸するわけである。この頃の漱石の経済状態は、 京に戻りたい意向が強かったようだが、次第に東京を遠ざかり、 数え年二十歳、戸籍キヨ、通称鏡子、と結婚式を挙げた。 そして六月九日、 現職のままで、 広島県深安郡福山町西町士族中根重一長女キヨ 年額千八百円の留学費が支給されるもので 姉ふさに仕送り三円、 父は翌明治三十 また、その 漱石は東 書籍 鏡子 遂

準が不明であるが、だいたい十円程度で、今の価格にして四万円く と考えられる。その年の暮れに鏡子宛の手紙では、 世界の富を一手に集め、産業と貿易の世界センターであったので らいだろうか。一か月にすると四十円になるから、手当の三分の一 発し、船と列車を乗り継いでロンドンに到着した。ロンドンの第 作ることはできたが、大型の軍艦を建造する技術はなく、 引かれたので、二十二円五十銭の手取りである。 なれど金のなきには閉口致候日本の五十銭は当地にては殆んど十銭 のないのと病気になるのが一番心細く候病気は帰朝迄は謝絶する積 日本の物価感覚と比較すると少なくとも五倍か十倍の違いがあった も勉強にも全く不十分であったようだ。明治三十年代のロンドンは から二万五千円くらいだろうか。ともかく百五十円の手当は暮しに はこれに消えるわけだ。三回目の下宿は一週二十五シリングという 度々物価高に驚く手紙を送っているが、下宿料の高いのには参った から一日の宿代が今の貨幣価値に換算して数万円であろう。 などの購入費などとして税金を取られたのである。九月八日 国製の船舶を購入していたため、日露戦争を想定して日本中が軍 の所謂臥薪嘗胆の時代であった。日本は小型の巡洋艦程度の船舶を 食を節して書物丈でも買へる丈買はんと存候故非常にくるしく候 り申候今度の下宿は頗るきたなく候へども安直故辛防致居候可成衣 か二十銭位の資格に候十円位の金は二三回まばたきをすると烟にな ようだ。二回目の下宿は一週分が二ポンドである。円に換算する基 回目の下宿に行ったが、一日食事つきで約六円(『研究年表』)という は横浜港でプロイセン号に乗った。そして十月二十八日、パリを出 休職給として月に二十五円が支給されたが、製艦費の二円五十銭を (以下略)」(明治3年12月26日付)と書いている。 その頃藤代禎輔宛 当時は日清戦争後 「当地にては金 殆んど英 漱石は

する逃避意識、 思はざりしが当地にきて見ると自ら己れの黄色なるに愛想をつか 地の十円位な相場かと存候」とか、「日本に居る内はかく迄黄色とは 四郎の母親が野々宮に手紙を寄越して、「何でも参拾円あると、 三四十円以上だから手のつけ様がない」と書く。『三四郎』の中に三 の一端はそのような処にも胚胎したとも考えられる 質主義的資本主義社会への危機感などが漱石を次第に現代文明に対 宛)と書く。ロンドンの物価高や金がすべての世界への嫌悪感、 て鼻にかゝる様な実に曖昧ないやな語だ」(2月9日、 からな情ない有様さ殊に当地の中流以下の言葉はHノ音を皆抜かし 底話す事抔は満足には出来ないよ第一先方の言ふ事が確と分らない は英語研究の為に留学を命ぜられた様なものゝ二年間居つたつて到 略)」(明治3年1月2日付)とかと書いている。 友人に宛てては「僕 し申候其上背が低く見られた者には無之非常に肩身が狭く候(以下 寸靴一足を買ひ候ても十円位はかゝり候にて(中略)日本の一円と当 たのは事実だろう。また、 ンでは本一冊も買えるか買えないかという彼我の経済格差が存在し 納得する。熊本の田舎では四人家族が半年程も暮せる金が、ロンド いくら田舎でも安すぎる様だと野々宮は言うが、三四郎の方は少し 人の家族が半年食つて行けると書いてあつたが」という場面があり、 の葉書には、いろいろと書物が欲しいけれども「一寸目ぼしいのは 厭離意識を醸成したとすれば、『坊っちやん』の構想 鏡子に宛て、「此地にて物価の高きは 狩野亨吉ほか 物 四

を受くれば一応の分別生じ且耶蘇教の随(情)性と仏国革命の殷鑑遠実行せしめる傾なくやと存候幸ひにして平凡なるものも今日の教育め若くは無教育に終らしめ却つて平凡なる金持をして愚なる主張をに基因致し候此不平均は幾多有為の人材を年々餓死せしめ凍死せし鏡子の父親には「欧州今日文明の失敗は明かに貧富の懸隔甚しき

うに金銭万能物質万能ではマルクスのような思想が現れるのも無理 度なり候間斯様な事を申上候「夏目が知りもせぬに」抔と御笑被下間 事と存候日本にて之と同様の境遇に向ひ候はゞ(現に向ひつゝある の悲哀である。当然のこととして鏡子は漱石の留学中、 中根重一は内務省を辞し、 は「御辞職後多少御困難の御模様も承はり痛心致し候」云々とあり、 抗、拒否を示すべきだ、『坊っちやん』の作意にそのような思いが潜 でもが西洋文明の悪弊に染まりつつあるような風潮には何らかの抵 **怖を覚えるようになるのではないだろうか。日本社会が地方都市ま** 社会に対する神経過敏な拒絶反応、或は欧州文明欧風化に嫌悪や恐 淡だった過去の書生然とした漱石はこの辺から次第に変貌し、金銭 米騒動などにある程度は現実化したとも言える。こうして金銭に恬 社会混乱が出来するのではないかという漱石の危惧は日比谷暴動や ない。日本も下層階級の者までが多少の知識を有するようになれば 社会に移行するように言うのは理論的に欠陥があろうが、今日のよ 思想では資本主義社会は必ずプロレタリア革命を招来し、社会主義 ティ精神で辛うじて崩壊や革命を免れているに過ぎない。 を行っている。西洋文明社会は失敗しており、キリスト教のチャリ 敷候」(明治35年3月15日付、中根重一宛)と書いて、西洋文明批評 事と存候小生は固より政治経済の事に暗く候へども一寸気焔が吐き も欠点有之べくとは存候へども今日の世界に此説の出づるは当然の と存候)かの土方人足の智識文字の発達する未来に於ては由々しき 為に尽力致候形跡有之候は今日失敗の社会の寿命を幾分か長くする からざるより是等庸凡なる金持共も利己一遍に流れず他の為め人の んでいると言えないだろうか。なお、 大事と存候 カールマークスの所論の如きは単に純粋の理窟として 五十歳そこそこで浪々の身となる。官僚 引用した岳父中根宛の書簡に 貧窮に陥り マルクス

たのはよく知られる。 三月末には第五高等学校、 町五十七番地の所謂猫の家に転居した。その後を大まかに辿ると、 矢来町の中根重一方に一先ず落ち着いた。三月三日、 とは『道草』に徴しても明らかであろう。正岡子規は明治三十五年九 借金もせざるを得なかった。こうした事も漱石の精神を悩ませたこ らしく、些細な事にも非常に腹を立てたり時には家人を殴ったりし 居した。漱石は神経が内攻し過敏に反応する時非常に攻撃的になる に送った。夏頃には神経衰弱がひどくなって、鏡子と九月頃まで別 漱石は後にこれに関して「水底の感」という新体詩を作り、 してこないことを二度注意したことがあったので、心配したという。 高生の藤村操が華厳の瀧に投身自殺したが、漱石は藤村が下読みを 八百円で、月給にすると六十六円余りである。五月二十二日に、一 りになる。同月、東京帝国大学文科大学講師になる。こちらは年俸 の辞令を受ける。 で新橋駅に到着した。鏡子は国府津まで出迎えに出て、東京牛込区 上陸した。そして、午後六時十五分発の急行に乗車し、約十五時間 た。十二月五日、日本郵船博多丸に乗り、地中海、 月十七日に亡くなり、漱石は帰国の前月の十一月に子規の死を知っ ンド洋を経てほぼ五十日に及ぶ航海を経て翌年一月二十三日神戸に 年俸は七百円であるから月給にすると五十八円余 依願免官、 四月に第一高等学校英語嘱託 スエズ運河、イ 本郷区千駄木 寺田寅彦

ころにユーモアや詩趣が生ずる。『草枕』『満漢ところぐく』などにそ 的な態度をとることが多く、まるで他人事のような接し方をすると は大体において社会的事象、特に戦争などに対して傍観者的で観照 いよいよ日露戦争始まったが、漱石は先に挙げた「水底の感」を寺田 に送るくらいだから戦争には余り関心がなかったと見てよい。 明治三十七年になっても神経衰弱は続いたようである。二月には

曜日に四時間で月俸三十円であるから、家計的には相当豊かになっ

0)

代的人間結合の様相で、それに対する赤シャツと野だいこの悪知恵 だが、事実漱石文学は現実や自我からの脱却解脱の感情を糧に文学 眼したかと言うと僧侶のようには自己滅却は出来なかったようで、 れは顕著で、 すると言われ、 ところ、老婆の按摩に、 ので、漱石は同情するが鏡子は猫嫌いなので追い出したいと思った の六月か七月、黒い猫が迷い込み、いくら追い出しても入って来た る禅寺での悟りの方向であり、これは晩年まで続く。さて、 中心とした時代の思い出である。もう一つは明治二十七年頃に始ま かっているように見える。一つは過去の無私的だった書生時代の交 に現れて対立軸の一方を形作る。漱石の志向性は大きく二方向に向 紐帯であろう。 グループはカネ(組織支配)とオンナによる利益誘導型近代型の人間 には子規の友情と俳句の生活の中に自我脱却の端緒があったと仮想 覚していたのはかつての書生的な友情ホモジニアス共同体で、端的 そこに文学や詩歌が出来た、というのは『草枕』の冒頭をなぞるよう れ以外はほとんど雲烟過眼視する傾向がある。しかし完全に雲烟過 ではない。大事はどうやら哲学や宗教の領域にあるようなので、そ 友、これは明治二十年代の学生時代、取り分け正岡子規との友情を 意識に対する誘惑憧憬のような感情があり、それが種々の小説の中 私友情共同体の疑似的形態と言ってもよく、どちらかと言えば前近 したのであろう。『坊っちやん』の中の坊っちやんと山嵐の団結は無 に向おうとした気味がある。漱石が現実から脱却していたように錯 |登場が近づいたわけである。九月、明治大学予科の講師となり土 命がけの戦争も漱石にとっては瑣事であり人生の大事 飼う気になって猫を飼う。いよいよ小説家夏目漱石 漱石は古めかしい道義的人間観に基づく無私の共同 爪の先まで黒い福猫だから飼えば家が繁盛 その年

円か不明である。いずれにせよかなりの大金を手にしたことは間違 学の特質の一面をよく物語っている。ともあれ小説家夏目漱石の誕 いない。十二月十四日に四女アイが出生した 石には風馬牛だったようで、書簡などを見ても全く関心がない。十 露講和条約、焼き討ち事件など世の中は騒然としていたのだが、 猫である』上篇が出版され、二十日で初版は売り切れたという。 が掲載された。しかし教員生活はまだ続いている。十月に『吾輩は 生である。翌明治三十八年一月の『ホトヽギス』に『吾輩は猫である』 小説が日露戦争の二百三高地の激戦の最中に書かれたことは漱石文 書き始めた。猫に仮託して人間社会への鬱憤を晴らそうとしたこの 高浜虚子に勧められ、「山会」に出す『吾輩は猫である』(題名未定)を は神経衰弱を亢進させたことは確かである。そんな中、 たであろうが、三つの学校を掛け持つ心労、煩雑さ、鬱陶しさなど 一月には『吾輩は猫である』の印税を貰い、外套や二重廻しをあつら **「確のため印税の額は、百四十二円五十銭か、その倍の二百八十五** あとは歳末や出産の費用にした。初版発行部数が千か二千か不 十一月中旬 漱  $\exists$ 

三十日、『吾輩は猫である』の稿料として三十八円五十銭、『坊っちと思ひます。」(四月一日付、高浜虚子宛)と漱石は書き送った。四月も大分進歩したものと見て是から続々五十二銭を出したらよからうで五十二銭のはありませんね。夫で五千二銭とは驚ろいた。今迄雑誌で五十二銭のはありませんね。夫で五千二銭とは驚ろいた。今迄雑誌で五十二銭のはありませんね。夫で五千五百部売れたら日本の経済で五十二銭のはありませんね。夫で五千五百部売れたら日本の経済で五十二銭のはありませんね。夫で五千五百部売れたら日本の経済で五十二銭のはありませんね。夫で五千二銭とは驚ろいた。今迄雑誌で五十二銭のはありません。 このような経過を辿って、年が明けた明治三十九年三月十四日のこのような経過を辿って、年が明けた明治三十九年三月十四日のこのような経過を辿って、年が明けた明治三十八円五十銭、『坊っち

悪漢
い正義漢の痛快悪者退治小説を書いたとも思えない。否、

まで、十数年の漱石の生涯のあらましである。を卒業してやがて松山に赴任した辺りから『坊っちやん』を世に送るやん』の分として百四十八円を受け取った。以上が漱石が帝国大学

ちではあるが、作中に度々言われる単純軽薄な江戸っ子ではない。 うか。奇しくも『坊っちやん』の出る前月に島崎藤村の『破戒』が自費 己本位の自分を回復する契機を摑みかけた漱石が、 東京に戻って教員生活に苦しみつつ、いよいよ『猫』辺りで正しく自 からロンドンというように西漸して再び東京に戻ったコースを考え ることも影響したに相違ない。東京から松山、松山から熊本、熊本 松山に赴任したのも種々理由は考えられるがそこが子規の故郷であ 純にも見られまい。今迄見たように漱石は東京生まれの江戸っ子育 て暴れさせた全くのスラップスティックであるかと言うと、そう単 違いと言えるが、藤村に『破戒』を書かせたライトモチーフが社会的 もう一つは何やら私闘めいた喧嘩沙汰で終わるというのが決定的な 語の教員であるのも一致する。一方は部落問題を扱う社会的小説で が因縁めいている。藤村も漱石も大きい社会的格差はあるものの英 去るのも同じで、 ある。また学校内の権力闘争を背景に複数の教員が一人の女性を競 なるもののどちらも地方の学校を舞台にし、教員が主人公の作品で 綴ったのはよく知られる。『破戒』と『坊っちやん』と、内容は全然異 差別に対する思想的憤激や批判であったとは言い切れないし、逆に 合するのも似ている。学校内の争いが決着し最終的に教員が学校を 出版されてたちまち大きな評判になった。漱石も一冊買って感銘を 『坊っちやん』は単純幼稚な坊っちやん先生を田舎の中学に解き放っ ではこの国民的人気小説『坊っちやん』はどういう小説なのであろ 同時期に似たような小説が世に現れたのは偶然だ 単なる落語的な

淵を読者に提供しているものであろう。い。文学作品は往々にしてそのように作者の意図を超えた読みの深意を超えてより深長な意味性を内在させることになったと考えてよはその積りで書いたかもしれないが、出来上がった小説は漱石の作

さて最初の問題としてこの小説の主人公であり語り手である「坊っちやん」とは何者であるかについて考える。こうした点に関してっちやん」とは何者であるかについて考える。こうした点に関してっちやん」とは何者であるかについて考える。こうした点に関してっちやん」とは何者であるかについて考える。こうした点に関してっちゃん」を正っととまっとあるのを重視し、この「十年前の事まい。」(明治39年10月23日付)とあるのを重視し、この「十年前の事まい。」(明治39年10月23日付)とあるのを重視し、この「十年前の事まい。」(明治39年10月23日付)とあるのを重視し、この「十年前の事まい。」(明治39年10月23日付)とあるのを重視し、この「十年前の事まい。」(明治39年10月23日付)とあるのを重視し、この「十年前の事まい。」(明治39年10月23日付)とあるのを重視し、この「十年前の事まい。」(明治39年10月23日付)とあるのと、こうした点に関してっちゃん」を書いたのだと推測し、更に次のように述べている。

を書くのは、きわめて自然な成り行きであった。を思い立ったとき、かつての都落ちを真正面から否定する作品いた漱石が、それと対立するもう一つの道として「坊つちやん」「吾輩は猫である」が退嬰的・消極的な方へ傾いているのに気づ

点である基本型に遡行しているのは、そのためであった。したぶ当時の漱石の等身像であったのに、この主人公が人生の出発しらぬ純粋素朴な青年として登場している。苦沙弥も迷亭もほろの若造となっている。人生経験も乏しく、生活上の苦しみもろの若造となっている。ところが、この作品の主人公は物理学校は二十九歳であった。ところが、この作品の主人公は物理学校「坊つちやん」執筆時の漱石は数え年で四十歳である。松山時代「坊つちやん」執筆時の漱石は数え年で四十歳である。松山時代

味を帯びて登場している。
味を帯びて登場している。
いている。一つは、身分ある人や他人をあって、これは彼の敵方が用いる意味である。他の一つは、あまやかされて育ったため世事に通ぜぬ男という語であって、これは彼の敵方が用いる意味である。この主人公は、時と場合によって、このような二重の、そのいずれか一方の意味を帯びて登場している。

から抽出した主人公は、第一に社会的規矩準縄に覊束されない人物 既に中年期に達した漱石が、それまでの人生を反語的に総和した中 ちやんという人物の輪郭が一定程度浮き彫りになるようだ。坊っち 腰を折る能わずと言った生き方を捨て、体制に順応する道であった。 の金銭のために腰を折る生活は、漱石の愛した陶潜が五斗米の為に の年に子規は大学を退学して俳句の道に進むべく「日本」に入社した 明治二十五年に北海道岩内に戸籍を移して徴兵逃れをしたこと、こ のかどうか。漱石が英国から帰国した明治三十五年冬の船上で堅く やんの一人称「おれ」による語りで構成されていることから考えても やん=漱石と考えることは無論出来ない訳だが、この小説が坊っち の道を取らざるを得なかったのであるが、それから四年して遂に漱 帰国直後は周知のように家庭が貧困の極みに瀕していたために糊口 来た、言わば学校や文部省の下僚に甘んじてきたのであるが、些 すとも考えられる。それ以来夏目金之助として英語の教員を勤めて が、漱石は英文学の学徒たることを捨てられなかったことなどを指 決意した十年前のこととは松山に都落ちしたことを指すのではなく 石は自己本位の道に進み出たと言える。このように考えると、坊っ 漱石が松山に行ったことを一概に「退嬰的な態度」と断定出来るも

い)坊っちやんを描きたかったと言えるのではないだろうか。 から文字通りの世間知らずの(というより、世間を知りたくなやん』の主人公を貫くのは社会不適応の小児性であり成熟の拒否で封建時代の狭間を行き来する放浪者のような人物、そして『坊っち対建時代の狭間を行き来する放浪者のような人物、そして『坊っちだと考えられる。つまり漱石は社会的不服従英雄、不遇独善の自由だと考えられる。つまり漱石は社会的不服従英雄、不遇独善の自由

着目しながら次のように坊っちゃんの性格を論ずる。 坂本は「親譲りの無鉄砲」という性格と清から見た性格の二面性に

一方から見れば、反抗・意地っ張り・乱暴となり、他方から見れば、正直・謙虚・正義感となる。このように相対立した二見れば、正直・謙虚・正義感となる。このように相対立した二見れば、正直・謙虚・正義感となる。このように相対立した二百観がなぜ生まれるかといえば、それは単純・素朴であるからだ。一般には複雑・多岐なものがさまざまな解釈を生み出すように考えられがちであるが、少なくとも文学上における性格描写はそうではない。かえって、単一なもの、純粋なものほど、型の応用、もしくは崩壊の姿でしかない。「吾輩は猫である」で、型の応用、もしくは崩壊の姿でしかない。「吾輩は猫である」で、型の応用、もしくは崩壊の姿でしかない。「吾輩は猫である」で、かが自らの等身大として主人公たちの多様化した性格を描いたからとする。そこに「坊つちやん」の主人公の性格の創造があっのである。そこに「坊つちやん」の主人公の性格の創造があったる。そこに「坊つちやん」の主人公の性格の創造があったる。そこに「坊つちやん」の主人公の性格の創造があった。

と説明する。しかし既述したようにこの小説は坊っちやんの一人称のような性格が社会から対立した二面的な評価を得るもととなった坂本は坊っちゃんの性格を「単純・素朴」「純粋・無垢」と考え、そ

医されて四国のどこかの中学に赴任したが一か月程で退職した若いち、自己回帰・自照文学の様相すらあるわけで、小説内言説を元にして性格論を云々することは些か躊躇われる。「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る。」(一)という書き出しは有名で、確かにこの主人公は小さい時から乱暴者で喧嘩早く、損得勘定で動く人間ではないように書かれ、その点は江戸時代の侠客にも擬されそうだ。村上浪六の撥鬢小説中の人物や講談本の主人公などに似ているかもしれない。が、物理学校(理科大)に通って数学を修めた経緯やその後の展開はエリート志向であり、べらんめえの一本気とは言えない。小説の中で案外金銭に細かく、カネに関する記述が多いのは誰しも気が付くところで、計算高いとまでは言えないがカネに無で語令とは言えない。よく知られるところだが、物理学校に入って四国に行くまでの経緯は次のように書かれている。

議なく引き受けた。 夫から五十円出して之を序に清に渡してくれと云つたから、異意に使ふがいゝ、其代りあとは構はないと云つた。(中略)兄はにして商買をするなり、学資にして勉強するなり、どうでも随にして商買をするなり、学資にして勉強するなり、どうでも随

に語学とか文学とか云ふものは真平御免だ。新体詩など、来てらうかと考へたが、学問は生来どれもこれも好きでない。こと三年間一生懸命にやれば何か出来る。夫からどこの学校へ這入巴を三に割つて一年に二百円宛使へば三年間は勉強が出来る。 はどうでもい、から、これを学資にして勉強してやらう。六百はどうでもい、から、これを学資にして勉強してやらう。六百はどうでもい、から、これを学資にして勉強してやらう。六百はどうでもいくが、

は二十行あるうちで一行も分らない。(中略)

る。師が入る。月給は四十円だが、行ってはどうだと云ふ相談であいが入る。月給は四十円だが、行ってはどうだと云ふ相談であと思つて、出掛けて行つたら、四国辺のある中学校で数学の教卒業してから八日目に校長が呼びに来たから、何の用だらう

愈約束が極まつて、もう立つと云ふ三日前に清を尋ねたら、 
の三畳に風邪を引いて寐て居た。おれの来たのを見て、起 
ま直るが早いか、坊っちやん何時家をお持ちなさいますと聞い 
た。卒業さへすれば金が自然とポッケットの中に湧いて来ると 
思つて居る。そんなにえらい人をつらまへて、まだ坊っちやん 
思いますと聞いますと聞いますが極まつて、もう立つと云ふ三日前に清を尋ねたら、

次も有名な一節であるが、茶代をはずんで驚かせる場面である。次も有名な一節であるが、茶代をやらない所為だらう。見すぼらしい屋へ押し込めるのも茶代をやらない所為だらう。見すぼらしい屋へ押し込めるのも茶代をやらない所為だらう。見すぼらしい屋へ押し込めるのも茶代をやらない所為だらう。見すぼらしい屋がありてである。おれは是でも学資の余りを三十円程懐に入れて東京でからう。おれは是でも学資の余りを三十円程懐に入れて東京で出て来たのだ。汽車と汽船の切符代と雑費を差し引いて、まを出て来たのだ。汽車と汽船の切符代と雑費を差し引いて、まを出て来たのだ。汽車と汽船の切符代と雑費を差し引いて、まを出て来たのだ。汽車と汽船の切符代と雑費を差し引いて、まを出て来たのだ。

円位で家族四人が暮らせたわけで、そのくらいの金を茶代に奮発し価値があろう。既述したが『三四郎』にあるとおり、田舎では一月五の話が出ているので明治の末頃と考えると、それでも二万円ほどの五円の茶代は明治半ばなら今の金額にして三万円程度、日露戦争

である。金で面を張るという言い方があるが、二十歳を幾つも だのである。金で面を張るという言い方があるが、二十歳を幾つも たのである。が、漱石の作意としては逆であったりというのもカネに 後で山嵐の一銭五厘に拘ったり、増俸を断ったりというのもカネに 後で山嵐の一銭五厘に拘ったり、増俸を断ったりというのもカネに と言った晋の王衍のようにカネを軽蔑しているのであろう。要する に江戸時代の武士や漱石が好んだ六朝時代の陶淵明やカネを阿堵物 と言った晋の王衍のようにカネを軽蔑しているような人物として描 いているのだろう。が、明治時代にそのようなことを実践するのは 現実的ではなく、やはり次に見られる小児性向、簡単に言えば餓鬼 のぽさなのである。

この主人公は人のことを気にかける気分屋であるのが不思議である。素朴で純粋な人物は田舎者を軽蔑したり、赤シャツや野だいこる。素朴で純粋な人物は田舎者を軽蔑したり、赤シャツや野だいこの言動に一々神経を尖らせたりするか疑問である。田舎の人々よりの言動に一々神経を尖らせたりするか疑問である。田舎の人々よりの言動に一々神経を尖らせたりするか疑問である。田舎の人々よりかような人間だと言う方がまずは適当なのではないだろうか。江戸っ子については後述するが、少なくもこの主人公は単純素朴とは言えない、強いて言えば小児性の人物と言える。それは漱石がそうであったと言うのでなく、社会から逸脱若しくは不適応的存在の志向が漱石の心内の奥底にマグマのように溜まっていて、その一つの現れとしてこの小説の小児的な主人公が造型されたからではないだろうか。後で見るが、例えば『それから』の長井代助はいつまでも社会った。後で見るが、例えば『それから』の長井代助はいつまでも社会のか。後で見るが、例えば『それから』の長井代助はいつまでも社会が漱石の心内の奥底にマグマのように溜まっていて、その一つの現が漱石の心内の奥底にマグマのように溜まっていて、その一つの現が水石の心内の奥底にマグマのように溜まっていて、その一つの現が水石の心内の奥底にマグマのように溜まっていて、その人々は割であるが、例えば『それから』の長井代助はいつまでも社会が水石の心内の東によりないといいは、

した変形であると考えられよう。

次のように思う。の廊下に仕掛けられた障害物で脛を打ち、どうすることもで出来ず、の廊下に仕掛けられた障害物で脛を打ち、どうすることもで出来ず、っちやんは宿直の晩に生徒からイナゴを床に入れられ、さらに二階いうことと、小説の枠を決定する清という老下女の存在である。坊いのように思う。

正直に白状してしまふが、おれは勇気のある割合に智慧が足りない。こんな時にはどうしていゝか薩張りわからない。わからないけれども、決して負ける積りはない。此儘に済ましてはおれの顔にかゝはる。江戸っ子は意気地がないと云はれるのは残念だ。宿直をして鼻垂れ小僧にからかはれて、手のつけ様がなくつて、仕方がないから泣寐入りにしたと思はれちや一生の名折だ。是でも元は旗本だ。旗本の元は清和源氏で、多田の満仲の後裔だ。こんな土百姓とは生れからして違ふんだ。只智慧のとい所が惜しい丈だ。

はふさわしからざることである。いずれにしても、はっきり言える質というのは、支配者である旗本意識から出たものではなく、被支言といってもいいであろう。もし坊っちゃんが口から出まかせの嘘を吐いたとすれば、彼のモットーたる正直に背くことになるし、そう信じこんでいたとすれば理屈に合わぬ無智となるであろう。また、もし主人公が旗本の直系であるとすれば、親爺は幕末の旗本であったはずで、何にもしないでぶらぶらしながら息子の悪口ばかりあったはずで、何にもしないでぶらぶら出たものではなく、被支質というイメージに背馳することにもなろう。その妻のお袋だって役者のような兄ばかり可愛がるというのは旗本の後裔たる家柄にて役者のような兄ばかり可愛がるというのは旗本の後裔たる家柄にて役者のような兄ばかり可愛がるというのは旗本の後裔たる家柄にて役者のような兄ばかり可愛がるというのは旗本の後裔たる家柄に

ことは、坊っちゃんの自己矛盾であり、それに気づかぬ彼の無智という点である。」と述べる。しかし小児性で社会不適応の人物を主人公にし、その人物の一人称語りで展開するこの小説は、全体としてコミカルな風刺画的作風であり、現実に触れる、触れないという議論で言えば明らかに触れない小説である。これは同時期に刊行された『破戒』を思い比べれば明白で、地方の学校と地域社会を舞台にする小説であっても筆致、内容ともに大きな違いがある。そう考えると風刺画的小説に現実的な裏付けや根拠・合理性を求めるのは木にと風刺画的小説に現実的な裏付けや根拠・合理性を求めるのは木にと風刺画的小説に現実的な裏付けや根拠・合理性を求めるのは木になほど重視する必要はなかろう。旗本だの満仲だのと大風呂敷を広げたところが、「智慧のない」と落ちをつけたのがご愛敬で漱石の好けたところが、「智慧のない」と落ちをつけたのがご愛敬で漱石の好けたところが、「智慧のない」と落ちをつけたのがご愛敬で漱石の好けたところが、「智慧のない」と落ちをつけたのがご愛敬で漱石の好がある。方の方とで、からない。

引くものだ」と考えられるという。小谷野は次のように述べる。明くものだ」と考えられるという。小谷野は次のように述べる。では坊っちやんが江戸っ子定義の諸説を参照し、江戸っ子は「⑴上と述べる。そして江戸っ子定義の諸説を参照し、江戸っ子は「⑴上と述べる。そして江戸っ子定義の諸説を参照し、江戸っ子は「⑴上と述べる。そして江戸っ子定義の諸説を参照し、江戸っ子は「⑴上と述べる。そして江戸っ子定義の諸説を参照し、江戸っ子は「⑴上と述べる。そして江戸っ子定義の諸説を参照し、江戸っ子は「⑴上と述べる。そして江戸っ子定義の諸説を参照し、江戸っ子は「⑴上と述べる。小谷野は次のように述べる。明くものだ」と考えられるという。小谷野は次のように述べる。明くものだ」と考えられるという。小谷野は次のように述べる。

演「私の個人主義」で、「個人主義」を、「解り易く云へば、党派英文学者として彼が学んだスウィフトに近いのである。彼は講口を学んだかもしれないが、そこに現れる抵抗精神は、むしろ漸石は、江戸の町人文化が生み出した「戯作」から、その語り

なものである。これは明白だ。貫こうとしているし、赤シャツ、野だいこの行動は、「党派的」ほど、坊っちゃんの行動は、時に判断を誤るにしても「理非」を心がなくつて理非がある主義なのです」と説明している。なる

のできない彼らの真面目さ、つまり「野暮」の好例である。れを邪気のないいたずらとして笑って済ます「いきなはからい」はる。バッタ事件、吶喊事件に対する彼や山嵐の考え方は、こける。で理非」とは何か。正論か。しかし、正論を言いつづところで「理非」とは何か。正論か。しかし、正論を言いつの

素町人根性丸出しの野だいこであろう。 素町人根性丸出しの野だいこであろう。 素町人根性丸出しの野だいこであろう。 素町人根性丸出しの野だいこであるう。 意うまでもなく、すでにある程度の慣習が成立した閉じた社 言うまでもなく、すでにある程度の慣習が成立した閉じた社

は大体において地方出身者に見られる性質である。江戸の庶民は人のだが、それは坊っちやんの原型にしては余りに迂遠というか遙かに遠すぎるようである。結局江戸っ子と作中の坊っちやんの関係がよく分からないというのも、小谷野が指摘するとおり実際問題として江戸っ子に抵抗精神や反骨を見る事は出来ないのであり、これはま例として尾崎紅葉の小市民性や小島政二郎『眼中の人』に見られるで江戸っ子を順紅葉の小市民性や小島政二郎『眼中の人』に見られるで江戸っ子を順紅葉の小市民性や小島政二郎『眼中の人』に見られるで、大体において地方出身者に見られる性質である。江戸の庶民は人れを取っても意気地のない小市民で、反権力の気骨とか野太さなどれを取っても意気地のない小市民で、反権力の気骨とか野太さなどれを取っても意気地のない小市民で、反権力の気骨とか野太さなどれを取っても意気地のない小市民で、反権力の気骨とか野太さなどれを取っても意気地のない小市民で、反権力の気骨とか野太さなどれを取っても意気地のない小市民で、反権力の気骨とか野太さなど、

という下女を媒介として旧時代の通俗倫理観を道徳規準とする人物 的な遣り口であろう。揚句に帰京して「街鉄の技手」になり、「月給 考える説は他にもあるが、武士は大義や虚名に命を賭するもので、 でもないのでそれを以てモデルに擬するのは適当ではないだろう。 先述した村上浪六撥鬢小説の下町奴などは侠客であり、実在の人物 うに述べている 持っていたことは誰しも感ずるところであろう。三好行雄は次のよ な人物でありながら、 文学を専門にして倫敦に留学した日本の近代人エリート代表のよう それが江戸っ子であり坊っちやんであると思われる。 ではないか。勿論坊っちやんは江戸時代の人間ではないのだが、清 江戸(時代)、旧時代にスタンスを置いている人物と考えればいいの 江戸っ子吹聴は何かと言うと、単純に江戸っ子は東京っ子ではなく 住したというべきであろう。では、この小説における坊っちやんの は二十五円」の生活に満足したのは、 小さな正義感や意趣返しに等しい夜討ちなどは余りに小粒な小身者 坊っちやんやこの小説の中に御家人、旗本の系譜や佐幕派の問題を の目を気にする小人物で、正義感や反権力とは無縁だからであろう。 反近代人・反西欧の近代人的な思考と性向を 清と二人で小市民的生活に安 漱石は英語英

化の外発性、つまり開化の方式をきびしく批判してはいるが、想」の解説、引用者注)夏目漱石は〈日本の近代化=西洋化の、想」の解説、引用者注)夏目漱石は〈日本の近代化=西洋化の、っまり「文明開化」の贋物性にいちはやく気づいていた〉思想家であり、〈しかし、近代そのものの危機という自覚はさほどつよくない。事実、そういう言葉も使っていない〉。「現代日本のよくない。事実、そういう言葉も使っていない〉。「現代日本のはの外発性、つまり開化の方式をきびしく批判してはいるが、想」の解説、引用者注)夏目漱石は〈日本の近代化=西洋化の思想」の外発性、つまり開化の方式をきびしく批判してはいるが、地の外発性、つまり開化の方式をきびしく批判してはいるが、地の外発性、つまり開化の方式をきびしく批判してはいるが、地の外発性、つまり開化の方式をきびしく批判してはいるが、地の外発性、つまり開化の方式を表しているが、地の外発性、つまり開化の方式を表しているが、

漱石はいちども信じなかったにちがいない。 托して、〈徳義〉が説かれねばならなかった事情も見やすいだろ ちで、〈近代の危機〉に迫ろうとしていた思想家であった。《我 実である。しかし語の正しい意味で、利他的な個人主義など、 されてよい。漱石のたえずくりかえした主題である。同時に個 が、人間的連帯のモティーフを本質としてふくまないのは注意 がばらく〜にならなければなりません。》 漱石のいう個人主義 は我の行くべき道を勝手に行く丈で、さうして是と同時に、 性がのこされていたとしたら、そのこと自体を決して否定する れば立ち行かないといふ有様〉を漱石は否定しているのであっ 文明開化自体、つまり西洋の近代化を理念とする日本の近代化 人主義が連帯への方向を閉ざしたゆえに、金力や権力の恣意に 人の行くべき道を妨げないのだから、ある時ある場合には人間 を認識した思想家ではない。しかし、個人主義の主張にあえて わけではない。(中略) 漱石はたしかに西欧流の〈近代の危機 う〈西洋の開化(即ち一般の開化)〉を内発的に推移してゆく可能 て外から無理押しに押されて否応なしに其云ふ通りにしなけ を批判してはいないようである。 〈徳義〉の錘鉛をつけねばならなかったとき、それとは別なかた かりに日本の開化が〈自己本位の能力〉によって、 漱石の志向にいわば利他的個人主義の方向があったのは事 〈急に自己本位の能力を失つ かれのい 他

た小賢しい小我とは無縁の存在のように見える。その拠り所になっずという点では小児的で俗っぽくはあっても近代という時代が齎しる食い意地の張る人物である。但し、生のままの自分を偽らず飾ら意地を張る痩せ我慢タイプではない。天麩羅蕎麦や団子を沢山食べ坊っちやんは決して道学者のような堅物でなく、武士のように片

うに思う。 間の様子などなど、それが漱石の書きたかった坊っちやん的世界で 的打算の出来る女性ということになっている。その点はこの段階で 多分に現実的利得に幻惑されてうらなり君を裏切る不徳義漢、現世 あり、その反措定が清であった。坊っちやんは釣りを止めて次のよ さな利欲に惹かれるお嬢さん、田舎の中学校内の勢力争いに蠢く人 え、しかもそのお嬢さんは萩野さん曰く「不慥なマドンナさん」で、 言うべきマドンナを赤シヤツの邪心の対象たる遠山のお嬢さんに進 く聖母マリアであり、イエスを生む母である。西欧文化の精華とも ターナーそつくりですよ」と言い、「あの岩の上に、どうです、ラフ を「全くターナーですね。どうもあの曲り具合つたらありませんね。 ツ、野だいこと釣りに行くプロットで、野だいこは四十島の松の木 ているのが清である。清―江戸っ子―坊っちやんの系譜を赤シャツ は見えていないけれども、聖母マリアも利欲に動かされる世界、 ハエルのマドンナを置いちや」と戯れた。マドンナは言うまでもな ん』的世界の負の面を象徴しているのが分る。坊っちやんが赤シヤ -マドンナと対照させると、「ラフハエルのマドンナ」が『坊っちや

おれにへけつけ御世辞を使つて赤シヤツを冷かすに違ない。江おれにへけつけ御世辞を使つて赤シヤツを冷かすに違ない。江間きたくもない。おれは空を見ながら清の事を考へて居い。又聞きたくもない。おれは空を見ながら清の事を考へて居い。又聞きたくもない。おれは空を見ながら清の事を考へて居い。又聞きたくもない。おれは空を見ながら清の事を考へて居い。又聞きたくもない。おれは空を見ながら清の事を考へて居い。又聞きたくもない。おれは空を見ながら清の事を考へて居い。又聞きたくもない。おれは空を見ながら清の事を考へて居い。又聞きたくもない。おれにはよく聞えない。又聞きたくもない。おれにはよく聞えない。又聞きたくもない。

っ子は軽薄の事だと田舎者が思ふに極まつてる。(五)江戸っ子でげすを繰り返して居たら、軽薄は江戸っ子で、江戸戸っ子は軽薄だと云ふが成程こんなのが田舎巡りをして、私は

婆さんである。此婆さんがどう云ふ因縁か、おれを非常に可愛落して、つい奉公迄する様になつたのだと聞いて居る。だから此下女はもと由緒のあるものだつたさうだが、瓦解のときに零人格化されている。よく知られる箇所だが、次に引いておく。 のように清は「馬車」「船」「凌雲閣」などという近代的な装置の対

ぜあんなに可愛がるのかと不審に思つた。(中略)母が死んでから清は愈おれを可愛がつた。時々は子供心にな

がつて呉れた。

(略)

飲約束が極まつて、もう立つと云ふ三日前に清を尋ねたら、と呼ぶのは愈馬鹿気て居る。と呼ぶのは愈馬鹿気で居る。とが自然とポッケットの中に湧いて来るとた。卒業さへすれば金が自然とポッケットの中に湧いて来るとまするが早いか、坊っちやん何時家をお持ちなさいますと聞いますの三畳に風邪を引いて寐て居た。おれの来たのを見て、起北向の三畳に風邪を引いて寐て居た。おれの来たのを見て、起いが東が極まつて、もう立つと云ふ三日前に清を尋ねたら、

て無条件で崇敬するのは、理由がよく分からない、愚者の愛情とも気性に合わなかったのかもしれないが、坊っちやんだけを特別視しつがとする。しかし何故に清は坊っちやんをそれほどまでに高くつがとする。しかし何故に清は坊っちやんをそれほどまでに高くなりでする。しかし何故に清は坊っちやんをそれほどまでに高くなりでする。しかし何故に清は坊っちやんをそれほどまでに高くなりでする。しかし何故に清は坊っちやんをそれほどまでに高くな性に合わなかったのかもしれないが、坊っちやんだけを特別視しな情に合わなかったのかもしれないが、坊っちやんだけを特別視しない。

を読みなおす』筑摩書房、

平成七、引用者)。那美さん同様、社

底勝てない。 底勝でない。 底勝でない。 底勝でない。 底勝でない。 底勝でない。 底勝でない。

ことは、 会では、 すことができる。小森陽一も主張するように、女性を、 で結婚相手を決定しようとしたことへの、一種の"処罰"とみな によって結婚することが社会慣習であった時代に、女性が自分 た生活を余儀なくされている。彼女の不遇は、親や親戚の意志 で好きになった男性との結婚を許されず、さらに別の男性との の人々の冷たい視線にも呼応する。『草枕』の那美さんも、 した、この地域社会の〝制裁〟は、『草枕』の那美さんへの、 会の誹謗中傷の的となっているが、マドンナ本人の意志を無視 会を支える。道具、として位置づけているホモ・ソーシャルな社 〝脅迫結婚〟が破綻して、 狂女と噂されるような精神的に鬱屈し 「みんなが悪るく」云ひます」とマドンナの、心変わり、は地域社 男性の支配を逸脱する越権行為となる(小森陽一『漱石 女性が結婚にあたって自己決定権を獲得しようとする 男性社 、地元

清とマドンナに関して佐伯順子が掬すべき論述を為している。

無節」な罪となるのである。
無節」な罪となるのである。
に放せるのである。
にかも、男たちの宴席では、「かの不貞無節なる御転婆をる。しかも、男たちの宴席では、「かの不貞無節なる御転婆をえ、死に値する罪を犯した女性とさえ位置づけられている。恋え、死に値する罪を犯した女性とさえ位置づけられている。恋え、死に値する罪を犯した女性とさえ位置づけられている。恋え、死に値する罪を犯した女性とさえ位置づけられている。恋え、死に値する罪を犯した女性とさえ位置がいる。

は、その名前に刻印されているのである。(中略) は、その名前に刻印されているのである。(中略) は、その名前に刻印されているのである。(中略) は、その名前に刻印されているのである。(中略) は、その名前に刻印されているのである。(中略) は、その名前に刻印されているのである。(中略)

聖母自身の意志とは無関係に、男性結社の美意識に基づく自己ラマであり、男たちは脱性化された聖母という中心を周り続け、ドラマは、声を奪われた聖母を中核とした男性集団の葛藤のドして、幻想としての女性像を必要とする。『坊つちやん』というを蔑視し排除しつつ、自らの存在確認のための行動の中心点とを蔑視し排除しつつ、自らの存在確認のための行動の中心点と

互に確認しているのである。(中略)喧嘩することで、闘争や流血を美化する自分たちの価値観を相繰り返す。男たちは喧嘩するから仲が悪いのではなく、逆に、充足的、自己満足的な男性集団の成員相互の葛藤という運動を

清いこと、性的な純潔を連想させる名である。 清いこと、性的な純潔を連想させる名である。 たけのないえるだろう。「清」という名も文字どおり、のセクシュアリティを剥奪された女性の主体的あるいは(男性にとって)過剰なセクシュアリティへの嫌悪から、「若い女も嫌ではないが、年寄を見ると何だかなつかしい心持ちがする」と、むしろセクシュアリティを剥奪された女性に安心感を覚えるのである。 これは、脱性化された聖母マリアを眺める時の男性の安心感と同質であるといえるだろう。「清」という名も文字どおり、感と同質であるといえるだろう。「清」という名も文字どおり、感と同質であるといえるだろう。「清」という名も文字どおり、

し、佐伯の所説にもあるように、マドンナと言う仇名を冠せられた のも『坊っちやん』という物語は肉付けに当たる部分が乏しい、即ち できるだろうかという疑念が出て来るからである。マドンナの変心 できるだろうかという疑念が出て来るからである。という できるだろうな論述を全て了とするのはいささか躊躇される。という なんからの伝聞である。マドンナと言う仇名を冠せられた と、佐伯の所説にもあるように、マドンナと言う仇名を冠せられた という

やったことと言えばどうも子供っぽい憂さ晴らしに近い。これもよ 悪質な陰謀家ではあるが、それも確たる証拠のあるわけでない。四 町一番の美形を巡って中学校教員内に隠微な軋轢が潜在し、その他 く知られる一節だが引いておく。 を企んでいたようだ。といったわけで、山嵐・坊っちやん連合は ったらしい。赤シヤツ教頭は以前から学校内の権力闘争で山嵐排撃 名付けたもので、その女性が封建道徳に反するような婚約破棄を行 そう言ったのでなく西洋美術を専門にしている画学の吉川が勝手に 国の田舎町にマドンナと言われる欧風の美女がいて、それも本人が ツ教頭が弟や新聞社まで使って山嵐を陥れたとすればこれはかなり めかしい侠客じみた心情の赴くままに乱暴に及んだわけで、赤シヤ 言葉に同調する。つまり赤シヤツらが奸物だからという、どこか古 にならないから、僕が天に代つて誅戮を加へるんだ」という山嵐の 等利害関係はなく、「あんな奸物をあの儘にして置くと、日本の為 って出て中学を去る。 野だいこ連合に反感を感じた坊っちやん先生が、自ら巻き添えを買 て、うらなり君の古賀と山嵐の両方にシンパシーを感じ、赤シヤツ に山嵐という仇名の数学教員堀田も邪魔者として排除の標的であっ **゙好物」に「天誅」を加えるという如何にも旧式な言葉を並べて、** 坊っちやん先生はうらなり君にも山嵐にも何

田圃になる。(中略)「貴様等は奸物だから、かうやつて天誅をの面二階へ潜んで、障子へ穴をあけて覗き出した。(中略)角屋の面二階へ潜んで、障子へ穴をあけて覗き出した。(中略)角屋ない。温泉の町をはづれると一丁許りの杉並木があつて左右はない。温泉の町をはづれると一丁許りの杉並木があつて左右はない。温泉の町をはづれると一丁許りの杉並木があつて左右はない。温泉の町をはづれると一丁許りの杉並木があつて左右はない。温泉の町をはづれると一丁許りの杉並木があって天誅を山嵐は愈辞表を出して、職員一同に告別の挨拶をして浜の港山嵐は愈辞表を出して、職員一同に告別の挨拶をして浜の港

だまつてゐた。 みに弁解が立つても正義は許さんぞ」と山嵐が云つたら両人共加へるんだ。これに懲りて以来つゝしむがいゝ。いくら言葉巧

来るだろう。 来るだろう。 来るだろう。 来るだろう。 来るだろう。 来るだろう。 来の町の枡屋の面二階」に潜伏し、障子に穴をあけて覗くといるだったのである。 これを要するに四国の田舎町にも吹いて来た悪いたがである。 でがいの監視と腹立ちまぎれの鉄拳制裁、卵投 がだったの町の枡屋の面二階」に潜伏し、障子に穴をあけて覗くとい

になるが、それは坊っちやん流の短絡的考えなのかジョークなのか 地元の人達のそれぞれに固有の、というか潜在的な悶着や罪障に巻 えたのは坊っちやんに言わせると封建時代からの習慣だということ き込まれて行き、遂には自ら短気を起こして一月ばかりのうちに うな四国の田舎町の中学に突然現れる。するとすぐに生徒と教師と 軽薄で世間知らず、向こう見ずな若者「おれ」が、異界とも言えるよ ると、江戸っ子を自称し、旧式な正義感と喧嘩っ早さが自慢でやや 「不浄の地」を去り、東京へ戻るという話である。 ここで再び原点に戻って『坊っちやん』という小説を簡単にまとめ 鹿と云ふんだらう。あやまるのも仮りにあやまるので、 ら後悔してあやまつたのではない。只校長から、 詫びたりするのを、真面目に受けて勘弁するのは正直過ぎる馬 の様なものから成立して居るかも知れない。人があやまつたり てやめるものでない。よく考へて見ると世の中はみんな此生徒 をやめないのと一般で生徒も謝罪丈はするが、いたづらは決し 形式的に頭を下げたのである。商人が頭許りさげて、狡いこと 祝勝会で学校は御休みだ。(中略)生徒があやまつたのは心か 田舎町の風儀が衰 命令されて、 勘弁す

けない。 にあやまらせる気なら、本当に後悔する迄叩きつけなくてはいるのも仮りに勘弁するのだと思つてれば差し支ない。もし本当

そして極めつけは最後の方の次の引用である。本当にそこは「不と云ふ声が堪へずする。(中略)こんな卑劣な恨性は封建時代から、養成した此土地の習慣なんだから、いくら云つて聞かしたら、養成した此土地の習慣なんだから、いくら云つて聞かしたも早く東京へ帰つて清と一所になるに限る。こんな田舎に居るのは堕落するよりはましだ。(十) を堕落するよりはましだ。(十)

日迄逢ふ機会がない。(十一)は、漸く娑婆へ出た様な気がした。山嵐とはすぐ分れたぎり今は、漸く娑婆へ出た様な気がした。山嵐とはすぐ分れたぎり今程いゝ心持ちがした。神戸から東京迄は直行で新橋へ着いた時」技でおれと山嵐は此不浄の地を離れた。船が岸を去れば去る

らぬというところだろう。 このように見渡すと、この小説の一応の構造のような形であるこのように見渡すと、この小説の一応の構造のような形である坊っちやんの側から小説を読むと、という前それは語り手でもある坊っちやんの側から小説を読むと、という前表がであるが、清もマドンナも与り知らぬことであるし、たぶん赤シヤツらも何で自分たちが天誅されねばならぬのか、さっぱり分かりがいると言える。しかしたのように見渡すと、この小説の一応の構造のような形であるこのように見渡すと、この小説の一応の構造のような形である

うか。『坊っちやん』という小説は、東京から四国の中学校に赴任し中心人物、悪の根源のようになっているのだが、果たしてそうだろ中してマドンナと呼ばれる遠山のお嬢さんはこの二派を生み出す

間の大部分の人はわるくなる事を奨励して居る様に思ふ。わるくな 風潮に流されて、聖母のようなマドンナもカネに目が眩んで容易に 受けたもんだと癇違いをして居やがる。話せない雑兵だ。」(四)と坊 生意気な悪いたづらをして、さうして大きな面で卒業すれば教育を るんだ。学校へ這入つて、嘘を吐いて、誤魔化して、蔭でこせく 奴等が卒業してやる仕事に相違ない。全体中学校へ何しに這入つて だ。金は借りるが、返すことは御免だと云ふ連中はみんな、こんな 或は中学校という明治学歴支配の末端組織が四国の田舎町にも上陸 性や恋愛は社会秩序を乱すべき、危険で神聖なゲームなのである。 深い人間関係は存在しない。が、うらなり君の流謫を画策した根本 な純粋な人を見ると、坊ちやんだの小僧だのと難癖をつけて軽蔑す らなければ社会に成功しないものと信じて居るらしい。 はホ、、、と笑つた。別段おれは笑はれる様な事を云つた覚はな 任者が何らかの校内紛擾に巻き込まれて免職の悲哀を嘗めたらし 係も虚々実々であり、実情は分からないながら、坊っちゃんの前 心変わりする女になったと考えられなくもない。中学校内部の力関 っちやんを憤慨させたような下卑た根性にしてしまった。そうした い。中央から伝播する悪風が純朴たるべき生徒たちを「いたづら丈 したことが抑々地方の醇風美俗を頽廃させる原因だつたかもしれな ない。漱石の文学では『それから』や『こころ』に見られるとおり、女 い。今日只今に至る迄是でいゝと固く信じて居る。考へて見ると世 いと、釣り船の中で聞かされる。すると坊っちやんは、「赤シヤツ で罰は御免蒙るなんて下劣な根性がどこの国に流行ると思つてるん モジニアスな社会に罅を入れる危険な聖母であったと言わざるを得 はやはりマドンナの存在である。となればマドンナは男性たちのホ た主人公の惹き起こすどたばた喜劇の様相を呈しているので、特に たまに正直

与していたからにほかなるまい。少し横道に逸れるが、そのような 域社会や学校制度その他の近代的制度などの制約から自由でありた 世故に長けた生き方を拒絶する強いポリシーを持つ頑固な人物と思 坊っちやんの系譜は『それから』の代助にも見る事が出来る。。 によって人格化されている封建時代的倫理感への共感を主人公に付 だろうか、と次々に疑問が湧く。それは結局漱石がそのように、 る。自分から進んで相手の拒否反応を誘っているようでもある。郷 ているという態度もあるはずだのに、この主人公は直に喧嘩腰にな けたのだろう。反骨天邪鬼もいいが強いて事を荒立てず、超然とし この坊っちやんはいつどこでこのような反骨の天邪鬼根性を身に付 が強い潔癖感を持って本音と建て前の使い分けを拒む。 どを教える方がいいだろうと述懐する坊っちやんは、単純で幼稚だ の小僧だの」と否定的評価をするが、それなら学校で嘘つきの術な わざるを得ない。「正直な純粋な人」に対して世間は「坊っちやんだ に入っては郷に従えというような処世訓はこの男は全く知らないの しかし今の引用を見ると坊っちやんは世間知らずなのではなく、 社会常識を強制する圧力には反発抵抗するという志向性や、 いったい、 清 地

「僕の知つたものに、丸で音楽の解らないものがある。学校

る贅沢な世界では、君よりずつと年長者の積りだ」(二の三)る贅沢な世界では、君よりずつと年長者の積りだ」(二の三)のと、教場へ出て器械的に口を動かしてゐるより外に全く暇がない。たまの日曜抔は骨体めとか号して一日ぐうく、寐てゐる。だから何所に音楽会があらうと、どんな名人が外国から来やうだから何所に音楽会があらうと、どんな名人が外国から来やうだから何所に音楽会があらうと、どんな名人が外国から来やうだから何所に音楽会があらうと、どんな名人が外国から来やうだから石はせると、是程憐れな無経験はないと思ふ。麺麭に関係した経験は、切実かも知れないが、要するに劣等だよ。麺麭に関係した経験は、切実かも知れないが、要するに劣等だよ。麺麭に関係した経験は、切実かも知れないが、要するに劣等だよ。麺麭に関係した経験は、切実かも知れないが、要するに劣等だよ。麺麭に関係した経験は、切実かも知れないが、要するに劣等によってるらしいが、僕の住んでゐ者は僕をまだ坊っちやんだと考へてるらしいが、僕の住んでゐ者は僕をまだ坊っちやんだと考へてるらしいが、僕の住んでゐ者は僕をまだ坊っちやんだと考へてるらしいが、僕の住んでゐる贅沢な世界では、君よりで見いない。

暢気なことを言うと思っているが、代助は自分の住む世界では自分 たものだろう。ロンドンから帰国した漱石は三校で教鞭を執って稼 優雅な体験談を語った後に、平岡との処世談義の一環として為され は素人であり、 て行くという考えである。平岡は、代助が坊っちやんだからそんな 疎外論に近い。自分を疎外する労働によって労働者は人間性を失っ 性を犠牲にする生活を指す。そのような生活は劣等で芸術も何もな であり、カネを得るために世の中に交じって齷齪し、 た発言である。ここで言う掛け持ち教師は漱石自身の体験を援用し い惨めなものだ。この考え方は或る意味でマルキシズムの説く人間 いだ。そして「麺麭に関係した経験」云々に於ける麺麭とは要はカネ イの復活祭を見たついでに広小路を歩いて上野の夜桜を見たという 方が老練熟達者であると主張する。つまり芸術などに関して平岡 右は長井代助が久し振りに平岡常次郎に会って食事をし、ニコラ 代助は高級な趣味を会得している。しかしこのよう 自由を失い個

気付かない。 な論理を振り回すのが、抑々坊っちやんの証拠であることに代助は

**た。すると平岡は言う。** 「日本対西洋の関係が駄目だから働かない」という奇妙な理屈をこね、次の引用は、代助と平岡の働く、働かない論議である。代助は

分の顔の事なんか、誰だつて忘れてゐるぢやないか」分の顔の事なんか、誰だつて忘れてゐるぢやないか」。大いに面白い。僕見た樣に局部に当つて、「そいつは面白い。大いに面白い。僕見た様に局部に当つて、「そいつは面白い。大いに面白い。僕見た様に局部に当つて、「ろの顔の事なんか、誰だつて忘れてゐるぢやないか」。大いに面白い。僕見た様に局部に当つて、「そいつは面白い。大いに面白い。僕見た様に局部に当つて、「そいつは面白い。大いに面白い。僕見た様に局部に当つて、「そいつは面白い。大いに面白い。僕見た様に局部に当つて、「そいつは面白い。

加えた。 代助は仕方なしに薄笑ひをした。すると平岡はすぐ後を附た。代助は仕方なしに薄笑ひをした。すると平岡はすぐ後をつける味方を得た様な心持がしたので、其所で得意に一段落をつける味方を得た様な心持がしたので、 其所で得意に一段落をつける味が

様なこと許かり云つてゐて、――」働らく気にならないんだ。要するに坊ちやんだから、品の好い「君は金に不自由しないから不可ない。生活に困らないから、

や名誉にならない。あらゆる神聖な労力は、みんな麺麭を離れ「働らくのも可いが、働らくなら、生活以上の働ぎなくつちぎつた。 代助は少々平岡が小憎しくなつたので、突然中途で相手を遮べ

てゐる」(六の八)

引用の中で平岡は代助を坊っちやんと規定して、坊っちやんだか引用の中で平岡は代助を詰るのに対し、代助はカネのために働くのら働かないんだと代助を詰るのに対し、代助はカネのために働くのはいけないのだとやや的外れな反論をする。「神聖な労力」というような観念がどのような労働を表すのか、果たして代助はこの世において「神聖な労力」を発現し得るのか、する積りがあるのかと言うと、いて「神聖な労力」を発現し得るのか、する積りがあるのかと言うと、でおから『の中ではそれに対する回答は見当たらない。友人の妻を恋慕することが「神聖な労力」に当たらないのは言うまでもないだろう。このように考えると『坊っちゃん』における破天荒な教師ぶりは代助の原型とも考えられ、騒ぎを起こして清のもとへ帰って行くパターンは、世の中から排除破滅する代助に類似するとも見得る。拙稿で『それから』について次のように論じたことがあるので、参考までに引いてみる。

年来の親友の妻である。それは今まで見たように代助は父の住 う最低レベルの生存を甘受せざるを得ない女である。同情以外 ず子供もおらず、夫は失業し、持病の心臓病を患っているとい り書いてあつた。」のである。かくて三千代は親や親戚には頼れ 出たいが都合はつくまいかと云ふ事や、 うな人間である代助は平岡によって世の中にコミットすること 的な世界の住人になることをどうしても肯定出来ない。そのよ ネの世の中に積極的に関わることが出来ない人間であり、カネ む世界にも平岡の住む世界にも積極的に参加できない、 の感情でこうした女に接近する者があるだろうか。しかも十数 は破産し、菅沼と母親が死んだ時には既に北海道に出稼ぎに行 たのは明らかであるが、すると三千代が上京して間もなく父親 っていたものと考えられる。三千代への手紙には「東京の方へ (美千代と父親の)諸事情は鏡子の父親中根重一の経歴に倣っ -凡て憐れな事ばか 即ちカ

学に描かれる女はやや類型的だが、概して男の友情ユートピア 従って代助が逆に三千代の道連れにされたとも言える。漱石文 非カネ的世界(陰画)は三千代の無の世界に止揚されるのである。 現する事が分かった時から、平岡のカネ的世界(陽画)と代助の としては無であるような三千代しかなかった。三千代と代助 逆煽動的に世の中から脱落する道に進むことを選択する、それ 神聖労働観などの空論からカネが支配する普通社会への回帰 ると、まず三年前の「渡金」的自分からやがて「真鍮」でいいのだ ものがオンナであるとも言える。代助が自然に帰る過程を考え 頂点とした学歴社会ヒエラルキーの一翼であった。それを壊す 国家の中枢を担う支配階層の予備軍的存在であり、 同態も近代学校制度の齎した擬似的な共同態(サロン)で、少数 を破壊する癌的な存在として現れる。男達のホモジニアスな共 の予定調和的世界を成しており、代助の前に平岡と三千代が出 道連れになることを予め定められていたと考えられる。それが とを放棄断念する、 滅に於いて成功するしかなかった。即ち世の中の一員であるこ すべく結ばれんとするが、それは三千代の死病と代助の狂的破 が三千代への愛の本質だと言ってもよかろう。だからその相手 を煽動されるわけだが、父から勧められる縁談も相俟って結局 と悟った段階があったわけだが、此の度の第一段階は、 は、石川三四郎の言う二人の温煖即ち人の自然的な結合を回復 (寺尾のような「社会の児」)、次いで第二段階として制度の埒外 『それから』における「自然」の本質であろう。 『それから』は一つ 特権的知識人の共同態は封建社会の中間集団などとは違って |田園回帰的現世厭離志向に近く、三千代は代助のその志向 それは原始的無政府主義、若しくは陶淵明 帝国大学を 、代助の

へ脱落する無政府主義的飛躍(「自然の児」)という、二段階の過

以上のような考察が多少とも肯綮に中るとすれば、その原型を程を踏むものであろう。

『坊っちやん』に見ることが出来るだろう。

中から『吾輩は猫である』『坊っちやん』の自己仮託小説を生み出し ギリスに強い嫌悪や危機感をもって帰国した。そして神経衰弱の の教師で英語でないのは何かの一つの示唆であろうが、英語の国イ 専門にして、英語を商売にした漱石であるが、『坊っちやん』が数学 げた作家であり、日本が近代化を為しとげた明治という時代を代表 ものと考えられる。三好行雄は「ヨーロッパの近代精神がその内部 先は何処か、といった煩悶を諧謔的にまた軽快痛快に笑い話のよう た。ロンドンから見た東京、東京から見た松山、 な危惧が漱石の心の底に深く植え付けられたのであろう。英文学を めば日本もイギリスのような失敗の社会になるだろうという直感的 った。そこで、日本はまだそこまで発展していないが、このまま進 的に察した。その直感の根源は要するにカネ、即ちイギリスが徹底 わった。そしてイギリスの資本主義社会が失敗の社会であると直感 に近代主義的に発展したイギリス社会を目の当たりにし、十分に味 ろ反近代主義の一面を強く持つと思われる。漱石はロンドン留学中 文学が近代主義的であるかと言うと、必ずしもそうではない、 する作家であることは疑えない。しかしだからといって漱石と漱石 実(近代)との距離感はそうした近代主義への嫌悪や離脱願望による に吐露したものが『坊っちやん』ではないか。漱石の観照的態度、 に眺め、旅が生み出す新鮮と苦痛、近代社会の苦艱から脱出する行 したカネ社会で、貧富の差が人間を駄目にしているということであ 全体としてまとめてみると、夏目漱石は日本の近代文学を作り上 熊本などを総合的

そのものの内部に発見されるという奇妙な事態が生じた。」(「漱石の まった日本の近代精神もまた同種の弱点や危機をはらんだはずであ ちでしかなかった。 や徳義の凱歌を上げるには至らず、付和雷同の憂さ晴らし的な闇討 れへの虚しい抵抗を試みたが、それは結局のところ正義の鉄拳制裁 やんは四国のある町の俗臭芬々たる田舎者たちに辟易憤慨して、そ 存在への志向は漱石のなかに常にあった。しかし江戸っ子の坊っち める。隠遁の風流人、市井の隠者のような脱社会、脱近代の退行的 バネにして創作に臨んだ。『坊っちやん』もそのような小説として読 反近代」)と言う。俳人でもあった漱石は、反近代の現実離脱欲求を 発性という抽象的な概念に、さもなければ、外発をうながした西欧 いたときでさえ、撃つべき敵は日本の近代精神ではなく、近代の外 ある。ひとびとは毒の存在にながく気づかなかったし、それに気づ ったゆえに、毒がいちじるしく薄められたという事情はいっぽうに る。外発的であろうとなかろうと毒は毒である。むろん外発的であ に弱点や危機をはらんでいたとしたら、西欧との接触によってはじ

に拡大したのは、論を急ぎ過ぎたきらいがあろう。その指摘を「同性集団の男色的絆――「日本的エトス」のありか」まで図式的その指摘を「同性集団の男色的絆――「日本的エトス」のありか」まで図式的小説を「声を奪われた聖母を中核とした男性集団の葛藤のドラマ」であるとい小説を「声を奪われた聖母を中核とした男性集団の葛藤のドラマ」であるとい

拙稿「夏目漱石文学の研究―『それから』を中心に―」(『人文学会誌』平成27・

3

7

究発表に基づくものてある。 辺大学で開催された言語文化比較研究国際シンポジウムにおける研本稿は平成二十九年八月十八日~二十日に渡って中国延吉市の延

(1) 「『坊ちゃん』事典」(勉誠出帆、平成26)参照

注

荒正人『増補改訂漱石研究年表』(集英社、昭和5)参照

2

- (3) 坂本浩『夏目漱石―作品の深層世界―』(明治書院、昭和4)参照
- (4) 小谷野敦『夏目漱石を江戸から読む』(中公新書、平成7・3)参照。
- 近代」(初出は『国文学』昭和4・8)参照。(5) 三好行雄『日本文学の近代と反近代』(東京大学出版会、昭和4)所収「漱石の反
- 究』2号、平成11・10)ではマドンナや清、さらに芸者小鈴らに注目し、この(6) 佐伯順子「聖母を囲む男性同盟 『坊つちやん』における男色的要素」(『漱石研

## 島崎藤村と函館

# -『津軽海峡』を中心に、藤村らしい一つの予定調和

伊狩

弘

を知り、さらに花袋から『罪と罰』を借覧し、三十七年一月には白檮 がて下獄する。藤村自身は新体詩人から小説家への転身過程で試行 次第に廃疾が深まっていた。長兄秀雄は金塊引揚げという途方もな りるために妻冬子の実家、 れたわけで、そのような状況下で一人藤村は孜々として自分だけの とうロシアとの戦争に突入し、国民の関心はすべて戦争に向いて行 いよいよ『破戒』の構想を固めて行った。しかし折も折、 山いそじ、三村喜乃子、丸山晩霞らとともに飯山真宗寺を再度訪れ. のであろう。そのような中で藤村は隣人の教師から大江磯吉のこと れず、藤村には文学の本道に踏み出すべき自信がまだ持てなかった となる。次の年に書いた『爺』『老嬢』もゾライズム的な作風を脱しき 錯誤の苦しみの中にあり、三十五年に発表した双子の小説の片割れ い詐欺事件に関与したために貧乏教師の藤村に無心を繰り返し、や 兄や姉はどうしていたかと言えば、姉の園は既に精神肉体を病んで の夏を迎えた頃であり、 て概説してみたい。 『旧主人』はモデル問題が風紀を紊乱するとの嫌疑を被り、 島崎藤村と函館、 藤村は三十三歳という若さであり、小諸義塾に赴任して六年目 日本人は出征兵士ならずとも生きるか死ぬかの瀬戸際に立たさ 並びに『津軽海峡』(『新小説』明治37・12)につい 明治三十七年七月に藤村が『破戒』出版費用を借 四月には三女の縫子が生れている。 函館の秦家に行ったことはよく知られ 日本はとう 発禁処分

うか、 の高野辰之も有名で、高野は真宗寺に下宿して小学校教員を二年間 軌跡はやはり海を越えて死に逢着するというもので、 3 に度々出かけたことが機縁となって藤村は『椰子の葉蔭』(明治3・ 季休暇を待って遠路はるばる函館に渡ったのである。 そのような心の動揺を抑えて、藤村は七月二十二日、 ら井上寂英の娘婿としてはつる枝と結婚した童謡作家、 からインドに向かう旅の途中、 名書きのある体裁をとっている。「帰東の途次」というのはロンドン 飯山の草菴にて/父上様/帰東の途次/僧なにがしより」という宛 ンを出発したのは明治三十五年九月で、小説の冒頭に「信州水内郡 井上寂英の娘婿藤井宣正の事績を手紙風に綴ったものである。その 厳の瀧自殺事件を想起させたのであろう。函館行きの旅はその年の いうこと、水路の危難に臨むということが藤村に前年の藤村操の華 の特派員になって大陸に渡るという。小諸から出征する若者も多い イド」(ポートサイド)から出した手紙であるからである。蛇足なが に出掛け、 十二月に『津軽海峡』という小品となった。それ以前に、飯山真宗寺 仕事に打ち込めるのか。 『明星』)を書いたが、それはロンドンからインド聖跡探査の旅 等々藤村の前には幾つも難関があった。 ロンドンに戻る途次にマルセイユ港で客死した真宗寺の 函館の岳父秦慶治が快く貸金に応ずるだろ スエズ運河の入り口の「ポオト、セ 盟友の花袋は博文館 宣正がロンド 小諸義塾の夏 海を越えると 歌謡研究者

勤めた後、上京した。『椰子の葉蔭』は次のように始まる

十月七日

別下には其後御機嫌麗しく、先月下旬まで英書利に御留錫、随別下には其後御機嫌麗しく、先月下旬まで英書利に御留錫、随印度へ向けて倫敦を出発いたし候。例の霧深く、英吉利海峡浪印度へ向けて倫敦を出発いたし候。例の霧深く、英吉利海峡浪印度へ向けて倫敦を出発いたし候。例の霧深く、英吉利海峡浪印度へ向けて倫敦を出発いたし候。例の霧深く、英吉利海峡浪の蘇延巴にて認めたる最後の書輪にて候ひき。さだめし父上はは欧羅巴にて認めたる最後の書輪にて候ひき。さだめし父上はは欧羅巴にて認めたる最後の書輪にて候ひき。さだめし父上はは欧羅巴にて認めたる最後の書輪にて候ひき。さだめし父上はは欧羅巴にて認めたる最後の書輪にて候ひき。さだめし父上はは欧羅巴にて認めたる最後の書輪にて候ひき。さだめし父上はは欧羅巴にて認めたる最後の書輪にて候びき。

こうして藤井宣正はインド聖跡探査に従事したが、熱帯の悪疫に こうして藤井宣正はインド聖が探査に従事したが、熱帯の悪疫に こうして藤井宣正はインド聖が探査に従事したが、熱帯の悪疫に こうして藤井宣正はインド聖が探査に従事したが、熱帯の悪疫に こうして藤井宣正はインド聖が探査に従事したとも考

入れたのかは不明だが、藤村より十四歳年下のこの少年と藤村とはるが、藤村がどの程度知っていて『津軽海峡』にこの青年の死を採りが英語を教えていたこの一高生は所謂哲学自殺をしたと言われてい生が華厳の滝に飛び込み自殺をしたことはよく知られる。夏目漱石さて、藤村が函館に行く前年、既述したように藤村操という一高

で操られているかのように何らかの因縁で繋がっている。それがキ

少し先を急いだが、今見たように藤村の人生と文学は見えない糸

因縁めいた繋がりがあった。

婚と死別がこま子との叔姪の悪因縁を招来し、最後には静子との 蔵は城代御取次役で維新を迎えた。輔子は明治二十八年五月に北海 明治十九年七月二十日に北海道で生まれ、十二歳で札幌中学入学直 手前まで行ったのであるから、操の死には共感したと思われる。 哲学自殺が流行した。藤村も『春』にあるように岸本捨吉の死の一 倣者が四十人も自殺し、三年後には岡山の女学生松岡千代が自殺し 子は北海道に関係深く、また藤村操の人生とも重なる所が大きかっ 婚から南米などへの巡礼の旅につながったわけだが、このように輔 との出会いと死別、また秦冬子との結婚と死別、そして冬子との結 ため死去した。鹿討豊太郎は昌蔵の最初の妻鹿討マサの弟である 道御料局官吏である鹿討豊太郎と結婚し、同年八月十三日に悪阻の ある佐藤輔子の家は盛岡南部藩士で、花巻の支城に勤め、父親の昌 藤村のファムファタル(多分一生を左右したであろう、運命の女)で 珂通世、歴史学者。藤村がどこまで操の経歴を知ったか不明だが、 地所社長、妹の夫は安倍能成で漱石門下生、 高等学校に入学した。父親は屯田銀行頭取、 に移り住み、開成中学から一年飛び級し、京北中学編入を経て第 後まで北海道で暮らした。明治三十二年に父胖が死去したので東京 父の胖は明治維新後に北海道に渡り、事業家として成功した。操は 感」を残し日光華厳の滝に投身自殺。操の祖父藤村正徳は盛岡藩士、 た。操の自殺と巌頭の感は明治中期の青年に大きい影響を与え、模 (花巻の鹿討立太の長男)。藤村の人生行路を羈束し方向づけた輔子 明治三十六年五月二十二日、 第一高等学校生徒藤村操、 胖の弟(操の叔父)は那 操の弟、 藤村朗は三菱

24

子供達と妊婦のこま子を残してフランスに向ったのである。とは達と妊婦のこま子を残してフランスに向ったのである。隣村はあるいは二度と日本に戻らないような悲壮な決意で、四人のようにして『突貫』(大正2・1『太陽』、『微風』所収)を書いた。「突ようにして『突貫』(大正2・1『太陽』、『微風』所収)を書いた。「突ある。藤村は姪こま子との妊娠に進退窮してパリに逃避することをある。藤村は姪こま子との妊娠に進退窮してパリに逃避することである。藤村はあるいは二度と日本に戻らないような悲壮な決意で、四人のモナド論のような予定調和的世界を作っていることは言えそうでリスト教的な物語に導かれるのかは即断出来ないが、ライプニッツリスト教的な物語に導かれるのかは即断出来ないが、ライプニッツリスト教的な物語に導かれるのかは即断出来ないが、ライプニッツリスト教的な物語に導かれるのかは即断出来ないが、

要体も近づいた。私は自分の仕事のためにいろく\心配しな 関ひは聞いて貰へるだらう。けれども手紙では駄目だ。その相 願ひは聞いて貰へるだらう。けれども手紙では駄目だ。その相 原ないことがある。多分函館の阿爺に話したら、私の は、どうしても自分で出掛けなければ成らない。 本の相 のためには、どうしても自分で出掛けなければ成らない。

小諸を発つことにする。何かは、東京まで行つて見た模様でなければ解らない。兎に角、何かは、東京まで行つて見た模様でなければ解らない。兎に角、いよ/\函館へ向けて小諸を発つ。斯の旅の危険であるか奈

東京へ着いた。カアキイ色の軍服は初めて私の眼に映つた。

( 略

て見る。(略) 成の人達に逢ふといふ楽みがある。私は行けるところまで行つ成の人達に逢ふといふ楽みがある。私は行けるところまで行つた。定期船は出るらしい。今度の旅には初めて函館を見て、親ない。兄も久し振で逢ひに来て、気を着けて行けと言つて呉れない。兄も久し振で逢ひに来て、気を着けて行けと言つて呉れ

到頭函館へ来た。(略)

末広町には阿爺の家の懇意な陶器屋がある。そこの旦那に誘

を知つた。私は三日ばかり早く函館へ着いて好かつた。尋常ならぬ屋外の様子で、敵の艦隊が津軽海峡を通過ぎたことさなお伽話を一つした。丁度その話をして聞かせて居る最中に、はれて養育院を見に行つた。私は貧しい子供を前に置いて、小

は駿河丸である)は敵艦に追掛けられたといふ船だ。帰りに乗つた駿河丸(註、『津軽海峡』で夫婦の乗った船の名

藤村が函館に渡った時、青函連絡船はまだ就航して居たと思われけする岸壁はまだなく、『津軽海峡』本文にもあるとおり、旅客はいったん艀に乗り、そこから本船に乗り移ったのである。そして日露戦争勃発以前でも津軽海峡を越えることは、気楽で安全な船旅ではなかった。というのも今ではあまり語られることもないが、明治三十六年十月、即ち藤村が函館を目指す九ヵ月前、津軽海峡では悲惨な海難事故が起きた。藤村も当然その事故は記憶して居たと思われる。

JGローリー社製(ACANTHA号)、八年に郵便汽船の三菱会社が購入 命ボートに乗せ、 し東海丸と改め、西南戦争や台湾出兵に軍用船として使われた。 突され、浸水した。東海丸は明治三年、イギリスのグラスゴーの 松前半島の矢越岬の沖合でロシアの貨物船プログレス号に船腹に衝 人は亡くなった。 し続けて船と運命を共にした。汽笛を聞いたプログレス号が戻って 水し傾いた東海丸の船長久田佐助三十九歳は、乗員乗客の全員を救 青森港を出港した日本郵船の東海丸は猛吹雪、 きて五十七人が救助されたが、激浪によりボートが転覆し、 明治三十六年十月二十九日午前四時頃、 久田佐助は元治元年石川県鵜川村に生まれ、 自分は船に残って沈没の瞬間まで非常汽笛を鳴ら 前日の夜、 濃霧によって難航し、 悪天候の中を 四十七

軍艦から守ることは出来なかったものと見える。 軍艦から守ることは出来なかったものと見える。 軍艦から守ることは出来なかったものと見える。。 軍艦から守ることは出来なかったものと見える。。 軍艦から守ることは出来なかったものと見える。。 軍艦から守ることは出来なかったものと見える。。 軍艦から守ることは出来なかったものと見える。。 軍艦から守ることは出来なかったものと見える。。 軍艦から守ることは出来なかったものと見える。。 日本製は小型のものが少しあるくらいであったようだ。 遼東半島の 攻撃などに船舶の大半を注ぎ込んでいたので、津軽海峡をロシアの 軍艦から守ることは出来なかったものと見える。

である。 に出た二人は船上で息子に生き写しの青年に逢うというストーリー夫婦が主人公で、息子を失った妻を慰めるために北海道へ巡礼の旅さて『津軽海峡』は藤村操に見立てた息子柳之助を亡くした中年の

自分の家内は耳が遠いものですから、傍へ倚つて余程大きな自分の家内は耳が遠いものですから、傍へ倚つて余程大きな声を出さないと聞えません。乗船の時刻が近いたのに、まだ家下度其窓の外には青森の港が見える。暗碧の色の海、群れて飛工度其窓の外には青森の港が見える。暗碧の色の海、群れて飛出帆するといふ二本檣の駿河丸、その郵船会社の定期船が湾頭出帆するといふ二本檣の駿河丸、その郵船会社の定期船が湾頭に碇泊して居る光景を眺めて茫然思ひ沈んで居たのです。いつた確泊して居る光景を眺めて茫然思ひ沈んで居たのです。いつことは、直に其後姿で知れた。自分は丁と一つ家内の肩を叩いことは、直に其後姿で知れた。自分は丁と一つ家内の肩を叩いことは、直に其後姿で知れた。自分は丁と一つ家内の肩を叩いことは、直に其後姿で知れた。自分は丁と一つ家内の肩を叩いことは、直に其後姿で知れた。自分は丁と一つ家内の肩を叩いて、

『さあ、仕度だ、仕度だ。』

## と急きたてました。

藤村の函館行きの行程と日露戦争の激戦の様子を並べて見れば、当時の緊張感は『津軽海峡』に描かれる中年夫婦の浮世離れしたような巡礼の旅の姿とは大いに違ったものであったと想像される。既述とった。秀雄は禁錮刑に処せられる直前であろう。二十五日に上野を発って二十六日に青森着。鳴海要吉、秋田雨雀の面会を受ける。二十七日に函館に渡ったのである。蛇足ながら田山花袋はその頃第二軍とともに遼東半島を北上し、半島の北の付け根あたり、蓋平盆地の東寄りの古家子という村に駐屯していた。南山と金州城の激戦の二か月後の頃である。遼東半島では第二軍は遼陽や瀋陽に向って北上し、乃木の第三軍は海軍の要請によって旅順攻撃にとりかかることになる。その頃日本の近海では浦塩艦隊が我が物顔に日本船舶の攻撃を繰り返していた。

する船舶を攻撃した。明治三十七年二月十一日(日露戦争勃発の翌リューリック・グロムブイは日露戦争開戦早々から日本沿岸を航行『津軽海峡』にも登場する悪名高いロシアの装甲巡洋艦、ロシヤ・

ĺ E 付近の玄界灘で、 となった。五月になると、ウラジオストクから朝鮮半島東岸に出撃 辺りで撃沈された。 炎上させた。ロシヤ他の三隻は元山港の沖に居た。 と金銭とを掠奪したといふ程の手合ですから」と書かれる船)を攻撃 十二t(『津軽海峡』に「敵はあの帆船の清渉丸をすら撃沈して、 月三十日には、元山港に水雷艇が侵入し、帆船幸運丸と清渉丸百二 別に攻撃された。六月十八日は、巴港丸他が停船を命じられ、 転用した船が殆んどであり、また民間の船(商船・漁船など)も無差 の損害を被った。軍艦と言っても軍需物資を運ぶために民間の船を 輸送船の貨客船金州丸三九六七tを撃沈した。六月十五日、 し、二十五日、 田から北海道へ出稼ぎに行く漁民八百人が乗船していて、 攻撃、全勝丸は逃げたが那古浦丸は青森県の十三湖の沖合二十キロ ナは津軽半島西岸に現れ、 八幡丸撃沈、 ロシヤ、 リューリック、グロムボイと巡洋艦ボガツィリ、 元山沖に至り、停泊中の五洋丸を撃沈、さらに海軍 陸軍運送船和泉丸擊沈、常陸丸擊沈、佐渡丸大破 博通丸拿捕、 那古浦丸は通常は米穀輸送船だが、この時は酒 小樽に向かう途中の全勝丸と那古浦丸を 宝徳丸略奪という被害を受けた。六 全員犠牲 沖ノ島 船荷

合で高島丸を撃沈した。『函館新聞』に「高嶋丸撃沈さる」の見出しのとまわった。七月二十一日の『函館新聞』に、「露艦津軽海峡を通過しまわった。七月二十一日の『函館沖を通過し、「露艦津軽海峡を通過しまわった。七月二十一日の『函館沖を通過し、「露艦津軽海峡を通過しまわった。七月二十一日の『函館沖を通過し、「露艦津軽海峡を通過しまわった。七月二十日からの二週間位、浦塩艦隊は文字通り日本近海を荒ら七月二十日からの二週間位、浦塩艦隊は文字通り日本近海を荒ら

袋が第二軍に従軍し、 ラジオストクに無事帰港した。津軽海峡を通ったのは七月三十日頃 船を次々に攻撃し、 奪の後爆沈、本州東岸を南下しつつ英国の船やドイツの船、 朝六時恵山沖にて露艦に撃沈され乗員一同ボートにて椴法華村に上 していたのである。 要衝)あたりの戦闘を見ていたのと同じように、 近海の民間の船を守る余力はなかったようだ。そう考えると藤村の なかった。日本海軍は旅順港の封鎖作戦などで手いっぱいで、日本 東岸で暴れまわり、 丸、百四十tの木造帆船を撃沈、北生丸、 を沈めた後、さらに恵山沖で英国船サマラを掠奪の後に釈放、 つかれば危険なことは明らかであった。浦塩艦隊はこうして高島丸 となった。このように全くの民間の商船も浦塩艦隊は無差別に攻撃 陸したりと」とある。椴法華村は恵山の麓にある村で現在は函館 して同船の扱店なる樋口回漕店へも何等の報もなきを以て同回漕店 らず盛岡なる三田銃砲店の本店より昨日午後四時『高島丸は撃沈さ を搭載して一昨日午後一時岩手県宮古港を出帆したるものにして本 下に「東京湾汽船会社所有船高島丸は当地会所町三田銃砲店の火薬 函館行きは決死の覚悟で敢行されたものと言え、 戻ったのが八月三日であるから、浦塩艦隊が津軽海峡を通って本州 かと思われる。藤村が函館に渡ったのは7月27日、函館から青森に したのであるから、 にては東京なる東京湾汽船会社へ照会したる由其後の報に依れは今 れた』との簡単なる電報ありたる由なるも其他に就ては全く不明に 日午前十一時頃には当港へ入港の予定なるが今に入港せざるのみな 駿河湾まで到達し、同じコースで八月二日にウ 藤村の乗船した日本郵船の船もロシア艦隊に見 帰港したのと入れ違いというか僅かな差でしか 七月末頃は大石橋(遼陽まで八十㎞くらいの 九十一tの木造帆船を掠 既述したように花 藤村も戦争に直 日本の

不の後これらの浦塩艦隊はどうなったかと言うと、八月十日に旅程のは当時の軍艦の能力の限界だったのである。その後これらの浦塩艦隊はだ順艦隊と強い大敗し、主力は旅順港に戻り、おのは当時の軍艦の能力の限界だったのであろう。その五日後、乃たのは当時の軍艦の能力の限界だったのであろう。その五日後、乃たのは当時の軍艦の能力の限界だったのであろう。その五日後、乃たのは当時の軍艦の能力の限界だったのであろう。その五日後、乃たのは当時の軍艦の能力の限界だったのであろう。その五日後、乃たのは当時の軍艦の能力の限界だったのであろう。その五日後、乃たのは当時の軍艦の能力の限界だったのである。

時、 やがて浦塩艦隊の「ロシヤ」他の軍艦が接近してもう駄目かと思った 死に突き当たった経験と重なって身につまされるものがあったと思 がけないのです。」という状態で、夫婦二人で巡礼の旅に出たのであ のも思ひがけないのです。第一、 なかつたのです。日々の出来事ー とも思はなければ、それが為に夫婦して斯な旅行に出ようとも思は 旅を思い立ったのである。「まさか忰があんな悲惨な最後をしよう 夫は息子を失って惑乱の極にある妻を慰めるためにこの北海道への うな男に荷物を盗まれるというストーリーである。 攻撃で危うい船旅をして、 東の隅で夏の一夜を明すのも思ひがけないのです。斯な船に乗る 、「吾艦艇」の出現によってやっとのことで助かる。すると下船 『津軽海峡』は、 既述したが、 その青年の連れの男、じつは唯の同船者で浮浪の護摩の灰のよ 藤村操の両親に見立てた中年の夫婦が浦塩艦隊の 藤村にとって十七歳の操の死は関西漂泊の途中に 船上で息子に生き写しの青年に出会う。 斯うして津軽海峡を通るのも思ひ ―誰に其が解りませう。 斯な奥州 語り手でもある

形象に操の姿が投影したかもしれない。われる。『春』はまだ書いていないわけだが、後の『春』の岸本捨吉の

さて漸く船が出帆して陸奥湾から海峡に出るあたりに差し掛かっ

た。

忰のやうな精神は、 世間を観るに、信仰の無い今の時代は青年の心を静にさせて置 校の生徒仲間でも万事に敗を取る柳之助ではなかつたのです。 **忰は学問を捨てたのです。学問もまた忰を捨てたのです。到頭** て反つて無学といふことを知りましたのが忰の不幸でした。噫 は確に柳之助の儚い潔い最後でせう。凡夫のかなしさ、学問し 現世を去る時の其心持はどんなでしたらうか。思想の上の絶望 ませて置いて、 つたのです。飛んだ量見違ひの大箆棒と、物見高い人々には睨 を嗅ぎ尋ねて、人生といふものゝ意味を窮めずには居られなか きません。忰の短い生涯が矢張其でした。飽くことを知らない ですから、早くから世の中の歓しいや哀しいが解つて、同じ学 ました。親の口から言ふのも異なものですが、夭死する位の奴 た忰のことを考へる。烈しい追懐の情は胸壁を衝いて湧き上り その清爽な七月下旬の海の声に心を澄まして居ると一 る。自分もまた舷の欄干に倚り凭つて、夏潮の音に聞き恍れて た。船旅の徒然に、 日光へ出かけて行つて、華厳の瀧へ落ちて死にました。 藍色の暖流は舷の左右に鳴り溢れて、 日も次第に高くなりました。日本海の方面から押寄せて来る深 常の灯台を遠く白く背後に見て、青森湾を出はづれた頃は といふことが彼様な青年の一生にも言へるものなら、それ 言ふに言はれぬ悲慨を懐中にしながら、 ありとあらゆる是世の事業と光栄と衰額と 人々は甲板の上を往つたり来たりして眺め 日の光に照り輝くのでし 黙つて 一ついま (中略)

本のです。 にも、、件が傷しい思を為尽して、死といふことに想ひ到つた時 を一変して了つたとは。実に、自分等夫婦は漂泊する巡礼の思 と一変して了つたとは。実に、自分等夫婦は漂泊する巡礼の思 と一変して了つたとは。実に、自分等夫婦は漂泊する巡礼の思 と一変して了つたとは。実に、自分等夫婦は漂泊する巡礼の思 と一変して了つたとは。実に、自分等夫婦は漂泊する巡礼の思 と一変して了つたとは。実に、自分等夫婦は漂泊する巡礼の思 でした。七月の海の空気を吸つて、工人の馬鹿は互に一人息子 の死を冥想しながら、夢のやうに潮の鳴る音を聞いて居りまし たのです。

恐怖と苦痛とを訴へはすまいか――どう見ても忰だ、柳之助だ、とはそれという。『父上さん、父上さん』と自分の手を執つて、幽界の深秘とけたら、『父上さん、父上さん』と自分の手を執つて、幽界の深秘と 生き写しであった。「噫、斯な船の中で、死んだ子に邂逅ふといふ 礼を受けたのであるから、亡くなった両親の考え方生き方とは全く で、ついにその青年にどこから来たのかと聞く。青年は「江州」だと 親馬鹿の迷想から、 筈も無いのですが、そこがそれ思做しの故で、もし是方から声を掛 青年が夫婦の傍で食い始めた。その一人の若者は亡くなった息子に 思われる。さてやがて船中に昼飯が配られる。弁当を持って二人の 代の推移と青年の生き方の問題は大きな前提として脳裏にあったと 異なる人生に進み出たわけで、この小説とは反対の立場ながらも時 藤村は明治の新しい時代に英語を専門とし、一度はキリスト教の洗 ままの自分等との落差を巡礼によって埋めようとするようである。 い青年の心の悶えのようなものと、旧時代の遅れた考えに捉われた の動揺錯乱を鎮めるために北への旅に出たのだが、明治時代の新し 右に引用したように操と思しき息子の死に際会した中年夫婦は心 斯な途方も無いことを考へました。」ということ

アニさん、つまり流れ者の労務者といったところか。でいたの、でありで、石をずりの護摩の灰であった。「あんこさん」とは「兄こ」の訛りで、な、流れ渡りの『あんこさん』を想ひ出させる」怪しい男で、これはは「酒と女に身を持崩して、五稜郭あたりへ行つて雪橇を曳くといな、流れ渡りの『あんこさん』を想ひ出させる」怪しい男で、これはは「酒と女に身を持崩して、五稜郭あたりへ行つて雪橇を曳くといな、流れ渡りの『あんこさん』を想ひ出させる」怪しい男で、これはない。首は、仙台に叔父がいるので出て来たが叔父は戦争に行き不在だ。

帰が海を渡った日を七月三十日にしているのである。
明治三十七年七月三十日と推定される。藤村はそれに合わせて、夫既述したが、浦塩艦隊が帰港の途に就いて津軽海峡を航行したのは、まで「自分」すなわち語り手の中年男も立って「海峡の東」を見詰めた。というので「自分」すなわち語り手の中年男も立って「海峡の東」を見詰めた。

『あれ彼の煙が君の目には見えないのかい。』

て、しきりに望遠鏡で眺め入つて居たのです。 この二人の対話に不審を打つて、自分も檣の側を離れた。遠 この二人の対話に不審を打つて、自分も檣の側を離れた。遠 この二人の対話に不審を打つて、自分も檣の側を離れた。遠 この二人の対話に不審を打つて、自分も檣の側を離れた。遠 この二人の対話に不審を打つて、自分も檣の側を離れた。遠 この二人の対話に不審を打つて、自分も檣の側を離れた。遠

急に自分等は不安の念に襲はれました。船は青森を抜錨して

武装の無い自分等の船の方へ向いて、殺気を帯びて寄り進んで ら徐行して来たのです。次第に接近して、やがて彼我の距離が **龍飛崎の方角を望んで、三海里ばかりの沖合を海岸に沿ひなが** 平洋沿岸に出没するといふ噂のあつた浦塩艦隊で、 望んで駛航してまゐりますと、丁度その大間崎の方角にあたつ 来た時は、 から、彼是四十海里も進行して来ましたらうか、 艦約半海里の間隔を置いて、 **五海里になると、艦影も判然しました。黒鼠色の三隻の敵艦が** て、雲のやうな煙が認められるやうになつた。二十分ばかりし 同じやうな第二の煙が顕出れる。つゞいて第三。それは太 -後れて、『リュウリック。』 船員も乗客も総立になつた。敵の陣形は単縦で、各 先頭に『ロシヤ』――『グロンボ 右舷大間崎を 大間崎から

『破戒』の成立にも関わるとも見られる。代の世相や青年を考える契機を幾つか持つし、死と再生という点で『緑葉集』の中でも余り重視されない短編小説であるが、明治三十年後に隠れて見えなくなる迄見送りました。」という所で小説は終わる。

る。 (『食後 ラピストを訪ねた確証はないので、作中に「斯の夏、北海道へ行つ この短編に表れている。藤村が明治三十七年の函館の旅の途次にト 生 作を連載したものの一つ)を書いている。その頃藤村は妻を亡くし 明治44・9・2~10・1、『時事新報』に「十人並」の総題の下に十二 のであるから慶治の案内でトラピストを訪ねたことはありそうであ て暮らすのと同様ではないかといった感想を持ったようで、それが 厭世頽廃虚無の人生観に取りつかれていたころであり、索漠たる人 人からの伝聞に基づくのかもしれない。しかし函館に八日間も居た て来た美術家の土産話が、私の胸に浮びました。」とあるとおり、 『津軽海峡』の他に藤村は函館に関係する小品として『トラピスト』 荒涼たる心のままであるならばお寺に住んで人と交わりを断っ 新藤村集』〈明治45・4、博文館〉所収、初出は『時事新報 友

そして次のように述懐した。 で居りましても、真に知つた人が少いとすれば、荒涼とした北海で居りましても、真に知つた人が少いとすれば、荒涼とした北海「私」はだんだん身につまされる。それは「斯様な町中に住居は致しては無言の行と激しい労働とが大切な規律であると言いながら、こうしてトラピストに宿泊した体験を聞き伝えで語るのだが、そ

表して見せて呉れるやうな気も致しました。 彩――丁度あの僧侶達は、私共の生活の光景を極く簡単に形にうと思ひます。墓――沈黙と労働――僅かな音楽――僅かな色ピストか、と疑ふやうなものは、広い世間にめづらしくなから とらく、私のやうに――北海道まで行かなくとも、自分もトラ

てのような人生素漢の観は明治末の藤村の強く感じたもので、このような人生素漢の観は明治末の藤村の強く感じたもので、 このような利廃意識はやがてこま子とのインセストを招来することに は夫の死に続いて妻冬子が産褥死するに及んで、自分の文学活動が 情夫の死に続いて妻冬子が産褥死するに及んで、自分の文学活動が は大の死に続いて妻冬子が産褥死するに及んで、自分の文学活動が は大の死に続いて妻冬子が産褥死するに及んで、自分の文学活動が は大の形に見えるが、高瀬 は、高瀬 なった。

ョンから仏語を習い、慶応三年にフランス行きの特使を命ぜられ、がら予定調和的に進行する。函館とフランスと藤村は細い線で結ばがら予定調和的に進行する。藤村は明治二十五年、数え二十一歳、栗本思議な因縁で浮上する。藤村は明治二十五年、数え二十一歳、栗本思議な因縁で浮上する。藤村は明治二十五年、数え二十一歳、栗本思議な因縁で浮上する。藤村は明治二十五年、数え二十一歳、栗本思議な田縁で浮上する。藤村は明治二十五年、数え二十一歳、栗本思議な田縁で浮上する。函館とフランス行きの特使を命ぜられ、から予定調和的に進行する。函館とフランス行きの特使を命ぜられ、から予定調和的に進行する。函館とフランス行きの特使を命ぜられ、

多村瑞見に結び着いた。などの記述ある。藤村はフランスでそれらを読み、『夜明け前』の喜明治元年に帰国した。『匏菴十種』の「暁窓追録」などにフランス事情

大剣』(昭和1・1)の「異本先生」にはりのような「節かある」という。「明和1・1)の「異本先生」にはりのような「節かあるのとでは、どつ物にさきがけするのと、しんがりをつとめるのとでは、どつちが勇気が要るでせう。前の方の人は進んで刺のある数の道をちが勇気が要るでせう。前の方の人は進んで刺のある数の道をものは、徳川の世の末でありました。最早徳川の世の中も是迄る前は、徳川の世の末でありました。最早徳川の世の中も是迄る前は、徳川の世の末でありました。最早徳川の世の中も是迄る前は、徳川の世の末でありました。最早徳川の世の中も是迄と思ふものは、大概の人が戸惑ひして、仕事もろくに手につかと思ふものは、大概の人が戸惑ひして、仕事もろくに手につかと思ふものは、大概の人が戸惑ひして、仕事もろくに手につかと思ふものは、大概の人が戸惑ひして、仕事もろくに手につかまった。

鋤雲といひました。先生は額も広く、鼻も厚く、耳や口も大き栗本先生は若い時の名を哲三といひ、年をとつてからの号を

先生が頭を持ち上げたのもその頃からです。 北海道の方へやられ、函館奉行組頭といふ役目につきました。 府の製薬局につとめた医者の出でありましたが、事情があつて 学問の家柄をついで薬草のことにくはしいところから、徳川幕 学問の家柄をついで薬草のことにくはしいところから、徳川幕 がつたものですから、『お化け栗本』の異名をとつたくらぬです。

当時の函館あたりはまだ『蝦夷地』と言ひまして、開けたばかりのさみしいところでしたが、先生は六年もそのさみしいところでしたが、先生は六年もそのさみしいところでしたが、先生は六年もそのさみしいとこりのさみしいところでしたが、養蚕の業に就くものが出来たのの『蝦夷地』に緬羊や牛を飼ひ、養蚕の業に就くものが出来たのの『蝦夷地』と言ひまして、開けたばか当時の函館あたりはまだ『蝦夷地』と言ひまして、開けたばか当時の函館あたりはまだ『蝦夷地』と言ひまして、開けたばか当時の函館あたりはまだ『蝦夷地』と言ひまして、開けたばか

長い生涯のをはりの方の日を送つてゐました。
な種類の芍薬を庭に植ゑ、その住居をも『借紅居』と名づけて、お訪ねした頃は、先生は最早七十を越してゐまして、いろいろお訪ねした頃は、先生は最早七十を越してゐまして、いろいろと知つたことを幸福に思ひます。わたしが本所の北二葉町を人を知つたことを幸福に思ひます。わたしは自分の心も柔く感じ易い年頃に、栗本先生のやうな

とを函館の町の基礎を作った鋤雲とを想起したと思われる。15・2)を刊行した後であるから、三十数年前に冬子の実家に借金前』を完成し、静子夫人とともに南米北米欧州を旅して『巡礼』(昭和前』を完成し、静子夫人とともに南米北米欧州を旅して『巡礼』(昭和このように藤村は鋤雲を回想しているのであるが、既に『夜明け

木村熊二は藤村をのち小諸義塾に誘うが、、その木村と親し安東璋二は、次のように藤村と函館について述べる。

れをつなぐ人間の系譜が潜在的にあったことを思わせる。れをつなぐ人間の系譜が潜在的にあったことを思わせる。れをつなぐ人間の系譜が潜在的にあったことを思わせる。れをつなぐ人間の系譜が潜在的にあったことを思わせる。れをつなぐ人間の系譜が潜在的にあったことを思わせる。

藤村の生に鋤雲が蘇えるのは、大正二年パリの客舎で『暁窓は録』を読み返したときである。このフランスの旅の意味につ追録』を読み返したときである。このフランスの旅の意味についてはいろいろ論じられるが、そこで彼が鋤雲のフランス見聞いてはいろいろ論じられるが、そこで彼が鋤雲のフランス見聞いてはいろの藤村の新生面が現れたということも、それも含めて家としての藤村の新生面が現れたということも、それも含めて家としての藤村の新生面が現れたということも、それも含めていましている。この時代から直接するもののあったことを考えたいのである。この時代から直接するもののあったことを考えたいのである。

礼の旅は遥かに、藤村のフランス行きと藤村静子のアルゼンチンペ関係も出来ている)に絡めた小説と見做すことが出来る。夫婦の巡学を貫く死と再生的なテーマを藤村操の投身事件(ここに漱石との館旅行をアレンジした副産物的な小説と見做されているが、藤村文館旅行をアレンジした副産物的な小説と見做されているが、藤村文の大場のである。この県代から直接するもののまったことを考えたいのである。この県代から直接するもののまった。

礼の旅で新開地に向かう父母が津軽海峡船上で我が子の形代に出会 倣自殺しようと言える。さて、 者の早合点、性急な短絡的理解に過ぎない、とは言え、急激な変化 うか。操の「巌頭の感」の中にも「ホレーショの哲学竟に何等のオー りに多くの思想や夢想が青年の心を攪乱し、前時代との紐帯を切断 軽海峡』の中に先に引用した「信仰の無い今の時世」云々の一節は、 説である。 栗本鋤雲の函館とフランス行きを日露戦争の地平に取り込むような 和とも言うもので、うまく出来すぎとも見られるけれども、 繋がる、言わば近代と非近代が程よく調和している、 瀧投身に見られる古い芝居じみた日本流儀 という西洋的近代文化の普及と日光中禅寺湖から流れる下る華厳の 出来したとも言える。それが青年の焦慮焦燥に火をつけ、 の心を動揺させたとすれば、その悲劇的顕現として操の哲学自殺が 供じみた浅薄な気取りとも見られ、「曰く不可解」と喝破したのも若 事寄せて、遺書を残すというのは秀才らしい仕業でもあり、また子 ソリチィを價するものぞ」云々とある。『ハムレット』の登場人物に したために青年たちの中には狂乱する者も多かったのではないだろ 思われる。「信仰の無い今の時代」とある通り、近代化の過程であま が多くの模倣自殺を生んだ現象もただの模倣とばかりは言えないと ながる苦悩もあり、 藤村自身の『春』の彷徨に重なるところもあり、また透谷の自死につ 視野を含みとして持った、藤村文学と近代史の接点を包み込んだ小 ン倶楽部の旅という未来を先取りしたようなテーマであり、さらに 世界を相手にする日本、 さらにロシア浦塩艦隊に遭遇するという藤村の筋書きは、哲学 日本の近代と反近代の矛盾という観点からすると、『津 『破戒』の猪子の死も想起させる。そして操の死 日本人といった途方もない空想が青年 哲学自殺の華厳の瀧を起点とし、巡 古めかしい修行者が 藤村的予定調 多数が模 行きつ

ているのではないだろうか。ゆえにやや繊弱で厚みの無い人間と社会の理解状態を如実に露呈し戻りつしながら独自の近代を構成した日本の近代文学の精髄、それ

注

村研究』平成10・9) - 栗本鋤雲・亀井勝一郎をめぐって---」(『阜

における口頭発表に基づくものである。ルに於て開催された日本近代文学会北海道・東北地区合同研究集会本論考は平成二十九年七月二十九日、函館湯の川温泉花びしホテ

### 調查方法

### 【第一回目】

アンケートの一番初めにきょうだいの有無、何人きょうだいか、出生順位を記入してもらい、その後にここ5、6年で親子関係やきょうだい関係に変化があったかどうかについて、記述式で記入してもらった。また、佐々木・佐藤(2008)の質問項目を用いて、各感情と両親に対するイメージの項目についてもっとも当てはまる~もっともあてはまらないの7件法を使用した。

### 【第二回目】

第一回目の調査項目に加え、落合ら(1996)の質問項目の親子関係について7件法を使用し、小島(2011)の家族関係単純図式投映法を用いてアンケートを制作した。

### 調査対象

### 【第一回目】

2016年2月中旬、数回に分けてMG大学の学生100名にアンケート調査を実施した。

### 【第二回目】

2016年11月中旬~12月上旬に分けて、MG大学生185名にアンケート調査を実施した。

### 総括

本研究は出生順位が異なることできょうだい関係・親子関係に差がでるのかを調べることを目的とした。その結果、親子関係やきょうだい関係に変化を見出すのは、未曾有の出来事よりもライフイベントによるものの方が大きいことが分かった。父親と母親の仲が良いと、子どもは肯定的感情を抱きやすいことが分かった。

青年期を迎えた女子大学生は思春期を迎えるきょうだいを気にかけたり、長子や次子の場合は親ときょうだいの間を取り持っていたりする事が分かった。また、家族関係を客観的に見ることが可能となり、親子の問題以外にも祖父母と親の関係についても気にかけている人がいる事も分かった。また、末子は父親と離れた関係を築きたい可能性が示唆された。

父親や母親の性格に対して良いイメージを持っている人が多く、特に同性の母親に対し良いイメージを抱いていることが分かった。出生順位による差はほとんど見られなかったことから、出生順位による育て方に違いは出るとしても、青年期になると両親に対して適度な距離を測りつつ、理解を深める関係になる可能性が示唆された。

出生順位によって親子関係やきょうだい関係に差が出るのではなく、きょうだいの性別によって親の関わり方が変わってくる可能性が示唆された。今回の研究では女子大学生のみの調査となり、性別や年齢差について検討出来ずにいるので、偏った結果となっている。次に生かす場合は、より幅の広い層に対して調査することが必要になるだろう。

### 修士論文題目及び内容の要旨

### 青年期女子の両親に対するイメージと精神的健康について ーきょうだい関係の視点―

菊田 あみ

### 問題と目的

近年、少子化が騒がれ二人きょうだい又は一人っ子家庭が多くなっている中、未曾有の災害や身近なライフイベントにおいて家庭の関係が壊れてしまうことも少なくない。また、格差社会が広がり皆等しい環境で子育てをするのが難しくなって来ているその中で、親子関係は多様な関係性になって来ていると思われる。

父母関係や父母に対する肯定的な認知は、肯定的感情を多く持つことを促進している。また、卒業 研究の調査では、否定的感情への可能性が大きかったのは、親子の間で否定的感情が扱われなくなっ ていることを示していると佐々木・佐藤(2008)は述べている。また、高橋江梨子(2009)の研究の考察では、きょうだいのいる子の場合、両親とも指導的であったり、子どもを差別的に扱ったりする場合がある。その時に、きょうだいという、特別な関係の持つ相補性が発揮され、親の脅威を切り抜ける場合がある。また、ひとりっ子の場合には両親とも指導重視であると認知している子が多い。これは、一般的なひとりっ子に対する過保護や甘やかしなどのイメージとは異なると述べている。

これらの先行研究に基づき、ひとりっ子ときょうだいを持つ子と親の関わり方を卒論に続いて調査したいと考えた。第一回の調査では長子は末子より母親からの期待が大きい(幸田・城谷 1981)ということから、他のきょうだいよりも厳しくしつけられる結果両親に対するイメージがあまり良く無い。次子・末子は長子よりも優しい環境で育てられると思うので、両親に対して良いイメージを抱きやすい。ひとりっ子は両親からの期待を一心に受け向上的だが、他にきょうだいが居ないため、両親に対して良いイメージを抱くという仮説を立て質問項目を先行研究から選定し、女子大学生100名に対してアンケート調査を行った。

全体を通して、両親に対するイメージが肯定的感情に繋がっていることが示唆された。

第一回目の調査では「親子関係と学生の感情」という視点で分析を行ってきた。

第二回目の調査では、両親のしつけの仕方と、両親に対してどのようなイメージを持っているかを調べることを目的とした。両親新しく追加された親の関わり方と家族関係単純図式投影法を行い、心理的な距離を表出させることで、女子大学生の家族関係について調査した。また、女子大学生にのみアンケートを実施するので、母親よりも父親を疎む気持ちが現れるだろうと仮説を立て、出生順位によって家族関係の近さについて調べることで、生まれた順番と親子の仲の良さ調べることを目的とした。

や企画について考えることが必要になってくると思われる。

⑥戦国BASRAがきっかけとなって白石市へ観光に来るお客が増えたが、ブームの衰退によって観光客が減少するのをくい止め、地域振興につながるような何かとってかわることができる大きなきっかけを生み出すアイディアが必要になってくると思われる。

ている条件とは、地域振興を率先して行うリーダーの存在であり、彼らのさまざまな経験から培ってきた発想やアイディアであることがわかる。また、その発想やアイディアを実現しようとして挑戦する前向きな姿勢は、今までなかった新しい商品や市場を作り出すことを可能にしている。

さて、地域振興の新しいリーダーたちを考察して分かった事柄は前述したが、ここでは、今後の地域振興を引っ張っていく新しいリーダーに求められるものは何かを考えたい。では、いったいそれは何だろうか。

新しいリーダーたちは周囲との交流や情報交換を積極的に行い、常日ごろから情報を発信する姿勢が見られる。このことはすなわち、さまざまな情報をキャッチするアンテナを張っているということであり、キャッチした情報をもとに次のアクションへとつなげている。また、生み出したことを積極的に発信し、情報の拡大にも力を入れている。こういった、情報キャッチのアンテナを張る、情報を受け取りまた送るというような情報網を密にするといった点が求められるのではないだろうか。発信の手段は、主にインターネット、テレビやラジオなどのメディアが考えられるが、本人が自ら出演し情報の発信を行うことも多く、積極的で前向きな行動力も必要不可欠な要素である。

また、新しいことを生み出すために失敗を恐れず挑戦するという貪欲さや他企業と協力し合っていいものをつくるという姿勢は重要であるとともに必要であると強く感じた。可能性を信じて向き合い、やれる限界まで諦めないこと、お互いの持つノウハウや技術、発想を最大限に活かして商品をつくることで次へとつなげる可能性やきっかけを生み出すこともある。そして、生み出した商品が白石市のPRに役立つこともある。そういった、絶好の機会を生み出しうまく活かすことができる能力も求められるのではないだろうか。

ここまで新しいリーダーに求められることは何かを考えてきたが、一番重要なのは、地元である白石市への愛着や地域の人を大事に思う気持ちである。今、地域振興を担っているあたらしいリーダーたちは、地元の外の世界との接点を広く形づくりつつも、何よりも、自分たちの地元への愛着を土台にしつつ、その新しい資質を具体的な成果に結び付けているといえる。

(今後必要、大切になるであろうことのまとめ)

- ①企業間の垣根を超えた交流と情報交換の場をつくり、新企画立案のきっかけなどを模索する機会 を確保する。事業内容・業種などを問わず、すべての企業が参加し、気軽にコミュニケーション を図ることが可能な場が必要である。
- ②地元の中小企業の活動の幅を広げていくことができるような地元企業が中心となる体制の整備や 制度の充実に力を入れる。
- ③若者の力が重要であり、地元で若者がいきいきと働けるような環境整備や一度地元を離れても戻って来られるような工夫が必要である。
- ④新しい地域資源を掘り起こすことで地域振興の発展や事業拡大の可能性が生まれるかもしれない。新しい資源としてあげられるもののなかに、廃校となって使われなくなってしまった建物や空き工場がある。それを活用した地域振興策、有効活用実現の充実のための具体的なアイディアが必要になってくると思われる。
- ⑤鬼小十郎まつりなどのイベントの帰りの観光客をそのまま帰らせてしまうのはもったいない。そこで、衰退しつつある商店街を活気づかせ、観光客に白石市の魅力を知ってもらえるような工夫

③新しいリーダーたちは、地域外での経験のほか、地域の外の世界との豊かな人脈をもっていて、 それを新しい事業や活動に生かしている。

このように、本論文では、新しいリーダー個々人とその経歴や人脈についても注目し、これまでに どのような人生経験をしてきたのか、その経験が活動にどう関わっているのかということについても 考察したいと考えている。仮説の検証を含めた調査結果は、第3章と終章のまとめのなかで触れる。

本論文の構成は、大まかに、外来型地域振興について(歴史など)→現在の地域振興の現状→調査結果を含めた新しいリーダーたちの活動や人物について→これからの白石市の地域振興の課題や方向性→全体のまとめである。これらをとおして、白石市の内発型地域振興の中心である地元企業で活躍する新しいリーダーたちはどのような人たちなのか。また、実際にどのような活動や事業を行い、今後どのような活動、企画を考えているのかなどの調査結果から考察、分析し、今後の地域振興の課題や方向性などを見出すことを最終目標とする。

### 結果

新しいリーダーたちは、白石市の地域振興に役立ちたいという思いが強く、県外などでのさまざまな経験を通して改めて白石市の魅力に気が付き、そこで培った経験や発想が白石市での仕事に生かされている。また、他企業や周囲の人と積極的に情報交換やコミュニケーションを図り、新しいアイディアや企画を生み出すための労力は惜しまない。そして、どの方も受身な姿勢ではなく、自分から前向きに情報発信をしている。白石市の認知度や知名度を向上させ、より多くの人に白石市に来てほしい、知ってほしいと考えるとともに地元を出た若者が戻ってこられるような環境づくりや若い社員がいきいきと働ける職場づくりを目指している。しかも県外との接点も大切にし、事業拡大に意欲的に取り組んでいる。これらをとおして、地域振興のリーダーたちは、かつては閉鎖的な傾向であったのが、今では開放的でオープンな雰囲気へと変わってきたということであり、姉妹都市との交流など違う地域や場所に住む人との交流も盛んになってきている。これからも地元企業とタッグを組んで新商品の開発を行うなどの活動は増えていくだろうし、外来型の企業や県外の企業と手を組んで活動することも増えていくことであろう。

次に調査にあたり立てた三つの仮説について、いったいどうであったのか見ていく。序章で記して おいた仮説は、つぎの三つであった。

- ①新しいリーダーたちは、比較的若い人たちである。
- ②新しいリーダーたちは、若いがゆえに、新しい発想やアイディア、また、柔軟な思考や経験をもっている。
- ③新しいリーダーたちは、地域外での経験のほか、地域の外の世界との豊かな人脈をもっていて、 それを新しい事業や活動に生かしている。

この三つの仮説について簡単にまとめると、①はさまざまな年代の方がいらっしゃり、平均50代前後あたりである。比較的若い人であるといえる。②は考察の結果などから見ても、全員が新しい発想やアイディア、柔軟な思考や経験をもっている。③については、地域外での経験や人脈を現在の事業に生かし、これからの活動に生かそうと考えている方が多くいらっしゃった。

このように見てくると、固有な地域資源を活用したさまざまな地場産業のあり方とそれを可能にし

であるのか)、発想、活動、つながりネットワーク(市内・市外・県外・海外)、世代交代の程度などに注目したい。特にこの中でもつながりネットワークというキーワードはとても重要性が高いように思われる。新しいリーダー達のアイディアや工夫、発想には、周囲との情報交換や交流が極めて強い影響を与えていることが多く、だからこそ他にはない地域固有の資源を活かした新商品が生まれ、それがヒットすることもあるからである。新しい地場産業の担い手達は、彼らが住んでいる地域の内部であろうが外部であろうが周囲とのつながりを大切にし、新たな発見や新発想のきっかけを見つける動きを積極的に行っている。そういった新しいリーダーを中心に周囲への働きかけやアイディアの売り込みを自発的に行ってきた地域の地場産業が成功する例も増えてきている(例えば、福井県鯖江市のメガネなど)。

本論文では、新しいリーダー層の現状とその可能性に注目する視点と平行させながら地域固有の資源に着目した内発型地域振興のこれからの可能性についても深く考察したい。地域固有の資源を最大限活かすためにはどのような努力や工夫が必要なのか、そしてそれを実現させる新しいリーダー層とはどのような人たちなのかについて考え、地場産業についてとことん掘り下げてみたい。

また、上に記した目的と視点のもと、新しい内発型地域振興が持つ地域振興にとっての重要性や多様(固有)な地域資源を活かした地場産業の具体的なあり方、またそのときの新しいリーダー層の現状とその可能性について、事例を通して明らかにしたい。

この事例対象については、宮城県白石市の内発型地域振興に貢献する地元企業、およびその企業で活躍する新しいリーダーたちとその活動としたい。なぜならば、ここ白石市においては、本論で詳しく述べるように、そのさまざまな地域資源を活かしつつ、多様な地場産業が展開してきているからであり、また、近年になってその活性化が図られて、それがかなりの成功をおさめつつあるからである。また、地域資源を活かした新たな産業も芽を吹きつつあるからである。さらには、白石城の復元を活かした新しい観光振興もかなりのところまで効果を出しているからである。しかも、これも本論で詳しく見ていくが、これらの動きをリードしているのが、多くの場合、これまでとは異なった、若手のリーダー層であるからである。

調査の方法としては、基礎的な資料の収集を踏まえつつ、詳しいヒアリング調査を実施することにしたい。そのなかで、企業の事業内容および地域振興に関する質問をこちらから投げかけ、その質問に答えて頂くというインタビューのような対話形式をとることとした。このような調査方法を実施することによって、企業や事業の概要、そして地域振興への取り組みの概要について知ることができるとともに、相手がどのような人物なのかがよく分かり、また生きた情報を直接聞くことができると考えたからである。また、お話しをお聞きするなかで今後の地域振興へのヒントなどを見つけることができるのではないか、今まで知らなかった世界をより深く知ることができるのではないかと思ったからである。このヒアリング調査の結果は主に第3章で記述し、終章では結果から見えてくる、考えられる地域振興の課題や新しいリーダーの可能性などについてまとめたいと思う。

次に、この調査実施にあたり立てた仮説は、次の三つのとおりである。

- ①新しいリーダーたちは、比較的若い人たちである。
- ②新しいリーダーたちは、若いがゆえに、新しい発想やアイディア、また、柔軟な思考や経験をもっている。

### 修士論文題目及び内容の要旨

### 地方都市の内発型地域振興の研究

遠藤 恵美

本論文では、近年における地方都市の地域振興、とりわけ内発型地域振興を取り扱う。このときに、内発型地域振興の多様化という点に注目してみていきたい。具体的には、固有な地域資源を活用したさまざまな地場産業のあり方とそれを可能にしている条件を実証的に明らかにしたい。つまり、各々の地方都市においてどのような地域資源が掘り起こされ、それがどのような地場産業へと結実しているのかを実証的に明らかにすることで、すでに指摘されてきた外来型地域振興にとって代わる新たな内発型地域振興の課題と方向性を明らかにしようと思う。それをとおして、市場のグローバル化という今日的状況にあって固有の地域資源に根ざした地場産業のこれからの方向と課題を明らかにできるのではないだろうか。

このときに、本論文では次のような視点から考察を展開する。それは、地場産業をリードする新しいリーダー層とその属性や活動に注目するという視点である。なぜならば、地域経済全般を見渡すとき、一方では、行政担当者を含め地域企業の経営者や事業者の世代交代は進みつつあるように見えるが、しかし他方で、地域固有の資源を多様に活かした内発的な地域振興に向けて地域を盛り立てていく新しいリーダー層の育成も急がれているからである。

このような状況にあって、自治体の中には、地域リーダー育成プランの計画を立てる自治体や地域 も出てきているが、なかなかその計画を達成できないことの方が多いようである。だが近年の内発型 地域振興の多様化やグローバル化といった新しい地場産業の成功の要となり得るのは、そのような状 況を自覚しつつ新しい地場産業のあり方を模索しようとするこの「新しいリーダー層」であると考え る。新しい地場産業への工夫や発想は従来の地場産業や担い手からではなく、今後の新しい若手のリ ーダーのアイディアやその活動から生まれていくのではないかと思う。地場産業を含めた地域振興の 新しい形を模索していくという点においても、新しいリーダーはどの地域にも必要不可欠になるであ ろう。この点も考慮して、すでに動き出している新しいリーダー層のその属性や活動から今後の地域 振興の可能性や方向性などを考え、また今後のリーダー達に期待されるものはなにか、地場産業のあ り方はどのようであればよいのかなどを深く考察していきたい。

上に記したように、グローバルな経済状況が進む中、地域固有の資源をさまざまに交差させた新しい地場産業の動向とその可能性を担保するには、それに対応した新しい地域リーダー層の出現が欠かせないと思う。しかし、これまでの地場産業研究においては、地場産業そのものの歴史や現状や課題について問題にしたものは多いが[伊藤 2011][小原 1996]、地場産業の新しい展開を担うリーダー層とその内容に着目した研究はほとんど見当たらない。本論文では、地場産業研究のそうしたスキマをなんとかして埋めようとする試みでもある。

さて、本論文では、新しいリーダー層の注目すべき具体的なポイントとして、属性(どのような人

# 宮城学院女子大学大学院人文学会会則

第一章 名称及び事務所

第一条 本会は、宮城学院女子大学大学院人文学会と称する

第二条 本会は、事務所を宮城学院女子大学大学院事務室内に置く。

第二章 目的及び事業

第三条 本会は、人文科学に関する研究を推進し、会員の知見を高

めるとともに、会員相互の親睦を図ることを目的とする。

本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。 各種研究会、研究発表大会及び講演会等の開催

機関誌、会報及び会員名簿等の発行

他の研究団体・機関等の連絡及び協力

その他、本会の目的を達成するために必要と認められる事

第三章 会員及び組織

第五条 本会は、次の一般会員及び特別会員をもって組織する。

一般会員

(1) 本学大学院人文科学研究科に学生として在籍中の者及

び同大学院を修了した者

(2) 本学大学院に研究生又は科目等履修生として在籍中の

者及び在籍したことのある者

(3) 本学大学院を中途退学した者

 $\widehat{4}$ 本学学芸学部を卒業し、他大学大学院に学生として在 籍中の者及び他大学大学院を修了した者

特別会員

(1)本学大学院人文科学研究科に専任の教員として勤務し

ている者及び勤務したことのある者

(2) 本学大学院に兼任又は併任の教員として勤務している

者及び勤務したことのある者

3 前号の規定する以外の者の有志で、本会則第七条に規 者。ただし、本号に該当する会員は、本会則第七条及 定する委員会の推薦により、総会において承認された

び第八条の規定に係る権利をもたない。

第四章 会員の権利及び義務

第六条 会員は、次の権利及び義務を有する。

機関誌、会報等の配付及び本会が開催する諸事業の案内を

受け、随時、研究成果を発表することができる。

2 会費は、毎会計年度内の指定された日までに納入しなけれ

ばならない

3 三年間継続して会費を滞納した場合には、会員の資格を失

第五章 役員及び任務

第七条 本会に、次の役員を置き、委員会を組織して、事務及び運

営に当たる。

会長は、本会を代表し、会務を統括する。

委 員

遂行するために、会務の運営と執行に当たる。 委員は、委員会を組織して会長を補佐し、本会の事業を

3 監査委員

度末に行う。ただし、必要に応じて、随時、行うことが 監査委員は、本会の会計を監査する。監査は、毎会計年

できる。

第六章 役員の選任及び任期

第八条 本会の役員は、次の方法によって選任する。

会長には、本学大学院人文科学研究科長を推戴する。

委員は、一般会員及び特別会員の中から推薦又は選挙によ って選任し、総会の議を経て、会長から委嘱する。

3 委員会の委員長及び副委員長は、委員の互選によって選任

する。

監査委員は、委員の中から互選によって選任し、総会の議

を経て会長から委嘱する。

第九条 役員の任期は、一年とする。ただし、再任を妨げない。

第七章 会議等の開催及び議決

第十条 本会は、毎年一回定期総会を開き、会務について報告し、 審議する。総会は、本会会員の二分の一以上の出席を持って成立

する。ただし、委任状を含むものとする。議決には、出席者の三

分の二以上の賛成を必要とする。

第十一条 会長は、会員の五分の一以上の要請又は委員会の議に基

づいて、臨時総会を招集することができる。

委員会は、随時、開くものとする。

研究発表大会は、総会の日程に併せて開催するものとす

る。

第八章 会計

第十四条 本会の経費は、会費その他の収入をもって充てる。

第十五条 本会の会費は、年額千円とし、四月末日までに納入する

ものとする。ただし、臨時に要する費用は、その都度、徴収する

ことがある。

第十六条 本会の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月三

十一日に終わる。

第十七条 本会の会計並びに監査に関する報告は、毎年一回、

において行う。

第九章 会則の変更

第十八条 本会則の変更は、委員会の議を経て、総会の承認を得る

ものとする。

附則 本会則は、一九九八年十二月二十三日から施行する。

宮城学院女子大学大学院人文学会誌

第 十九 号

二〇一八年三月三十一日 発行

発 行 人 宮城学院女子大学大学院編集及び

〒九八一一八五五七

★ (○ | 三 |) 二七九—五八三四人 文 学 会 深 澤 昌 夫 仙台市青葉区桜ヶ丘九—一—一

株式会社 東 誠 社

印刷所

仙台市宮城野区岡田西町一―五五